柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第9

夏渡の百塚

——新潟県柏崎市・夏渡の百塚発掘調査報告——

1989

柏崎市教育委員会

夏渡の百塚

——新潟県柏崎市・夏渡の百塚発掘調査報告——

1989

柏崎市教育委員会

序

柏崎市東部の丘陵地帯は、非常に多くの塚が発見されています。特に、長鳥川を中心とする北条は、塚群の宝庫とも言える地域であります。北条における塚の発掘調査は、南条のじょうきん塚、北条の国光の塚群に続き、今回の夏渡の百塚で3遺跡が調査されたことになります。

夏渡の百塚は、地元で「百塚」として親しまれ、また畏怖の念を持って、人々の生活の中に溶け込んでいたと考えられます。しかし、この百塚が、何時、誰が、何のために累々とした塚を造ったのか、長い間の謎となっていました。市内でも規模の大きな、この百塚の謎解きは、人々の興味を引き付けるものといえましょう。

このたび、東京電力株式会社は、柏崎刈羽原子力発電所から関東方面への電力供給のため、二つ目の送電線ルートの建設を計画しました。送電線ルートに沿って、数多くの鉄塔が建設されますが、その中の用地のひとつに、夏渡の百塚の一部が含まれることが明かとなり、今回の発掘調査となりました。発掘調査された塚は、工事予定範囲内に所在した5基の内、2基に対し実施しました。その他の3基については、塚を損なわずに工事するよう配慮して頂くことになり、現状のまま保存されることになっています。

今回の発掘調査によって得られた成果は、遺物もなく築造年代や性格等、百塚の謎を解き明かすまでには至りませんでしたが、塚の構築方法等の基礎的な事実を確認できました。これらの成果を報告する本書が、研究者のみならず、広く一般の人々にも活用され、更に埋蔵文化財や地域の文化財に対し理解が一段と深められるよう願っております。

なお、発掘調査に当たって、東京電力株式会社並びに同柏崎刈羽工事事務所の各位からは、埋蔵文化財及び発掘調査に対し、御理解と御協力を頂き、心から御礼を申し上げます。また、新潟県教育委員会からは、御指導と御助言を賜わったこと、並びに発掘調査に御協力頂いた地権者や地元夏渡を中心とした地区の方々及び調査員各位に対し、深甚なる謝意を表します。

平成元年3月

柏崎市教育委員会
教育長　山　田　恒　義

例　　言

1．本報告書は、新潟県柏崎市大字東長鳥（夏渡）に所在した「夏渡の百塚」の発掘調査記録である。

2．発掘調査は、東京電力㈱が計画した送電線第２ルート建設に係る送電線鉄塔建設事業に伴う緊急発掘調査である。発掘調査の業務は、柏崎市が東京電力㈱から受託し、柏崎市教育委員会が主体となって実施した。

3．発掘調査現場作業は、昭和63年５月９日から同年６月16日まで延べ29日間にわたって実施し、整理・報告作業は昭和63年６月28日から平成元年３月31日までの間に行なった。発掘調査の経費については、事業主体である東京電力㈱が負担した。

4．発掘調査現場作業は、地元夏渡を中心とした地区の有志（代表・夏渡区長・室賀達雄）から協力を頂いた。整理・報告作業は、調査担当の品田高志を中心に遺跡調査室において実施した。本書の執筆及び編集は、品田が行なった。

5．発掘調査による出土遺物は、「夏渡」から「NW」の略号と出土位置及び出土層序を注記し、一括して柏崎市教育委員会が保管・管理している。

6．発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の機関等から御指導やご助言を賜わった。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

川又昌延・笠井吉正・白井源一・寺崎裕助・室賀正子・新潟県教育委員会・柏崎市史編さん室・柏崎市立図書館・柏崎地域広域事務組合・東京電力株式会社及び柏崎刈羽工事事務所

調　査　体　制

調査主体	柏崎市教育委員会	（教育長　山田恒義）	
	総　括	仲野新一	（社会教育課長）
	管　理	小林清禧	（社会教育課長補佐）
		花井憲雄	（社会教育係長）
	庶　務	阿部せつ子	（社会教育課副参事兼庶務係長）
		内山敏夫	（社会教育課庶務係主事）
	調査担当	品田高志	（社会教育係学芸員）
	調査員	阿部正昭	
		小林琢也	
発掘調査作業員	室賀達雄・白井勝平・五十嵐　厳・室賀佐忠美・白井広治 室賀幸子・室賀節子・白井ムラ・石橋春子・五十嵐ヒサ子 江尻キヨ・室賀フミヨ		
整理・報告作業員	黒崎和子・大野博子・佐藤芳子・小野塚徹夫		

目　　次

I　序　　説 …… 1

1　発掘調査に至る経緯 …… 1
2　発掘調査の経過 …… 2
3　発掘区の設定 …… 4

II　環　　境 …… 5

1　地理的環境 …… 5
2　歴史的環境 …… 5

III　調査の概要 …… 11

1　基本層序 …… 11
2　調査区の概要 …… 11

IV　百　　塚 …… 13

1　立地と現状 …… 13
2　第12号塚 …… 15
3　第13号塚 …… 17
4　第14号塚と第15号塚 …… 20
5　塚関連出土遺物 …… 20

V　百塚以前と以後 …… 21

1　縄文時代 …… 21
2　中・近世 …… 23

VI　考　　察 …… 25

1　長鳥川流域における塚(群)について …… 25
2　夏渡の百塚について …… 28
1)　百塚の群構成
2)　第12号塚・第13号塚の検討
3)　夏渡に百塚の検討　――まとめにかえて――
3　おわりに …… 33
引用・参考文献 …… 34

写真図版目次

図版１　夏渡の百塚周辺航空写真
図版２　夏渡の百塚遠景　１．杉平(南)から　２．峠(南西)から　３．吉井黒川・神塚(西)から
図版３　百塚の調査前　１．東から　２．北西から　３．南から
図版４　表土剝ぎ　１．第12号塚　２．第13号塚　３．第12号・第13号塚
図版５　第12号塚　１．発掘前　２．盛土の状況　３．塚盛土範囲
図版６　第12号塚　１．盛土上層発掘　２．基底部と土層(第４区)　３．基底部と土層(第３区)
図版７　１．第12号塚盛土層南北セクション　２．第12号塚盛土層東西セクション
図版８　１．第12号塚基底部（南西から）　２．第12号塚基底部（南から）
図版９　１．第13号塚発掘前　２．第13号塚腐養土除去
図版10　１．第13号塚盛土状況　２．第13号塚上層発掘と塚のプラン
図版11　第13号塚　１．南北セクション　２．東西セクション　３．浅いピット
図版12　１．第13号塚基底部（北西から）　２．第13号塚基底部（南から）
図版13　１．第15号塚　２．第14号塚
図版14　１．SX－10焼土遺構確認　２．SX－10焼土遺構完掘全景
図版15　SX－10焼土遺構セクション　１．A断面　２．B断面　３．C断面
図版16　１．縄文時代ピット群　２．SK－９土坑　３．SX－11ピット群
図版17　１．SX－12　２．SX－13　３．SX－13断面
図版18　１．完掘状況（南から）　２．完掘状況（北から）
図版19　１．縄文土器　２．縄文土器、おはじき、焼土塊
図版20　１．第12号塚頂部から　２．発掘調査参加者

挿図目次

第１図　発掘調査スナップ …… 3
第２図　調査区設定図 …… 4
第３図　柏崎平野地形分類図 …… 7
第４図　長鳥川流域の遺跡分布図 …… 9
第５図　調査区全体図 …… 12
第６図　夏渡の百塚分布模式図 …… 14
第７図　夏渡の百塚全測図 …… 折り込み
第８図　第12号塚基底部 …… 15
第９図　第12号塚土層断面図 …… 16
第10図　第13号塚基底部 …… 18
第11図　第13号塚土層断面図 …… 19
第12図　D－６グリットピット群 …… 21
第13図　出土遺物 …… 22
第14図　ＳＸ－10焼土遺構 …… 24
第15図　柏崎平野東部の塚(群)と城館跡分布図 …… 26
第16図　第12号・第13号塚の基底部と盛土 …… 30

表目次

第１表　長鳥川流域の遺跡地名表 …… 8
第２表　長鳥村の小集落 …… 10
第３表　長鳥川流域の塚(群)地名表 …… 27

Ⅰ 序　　説

1　発掘調査に至る経緯

夏渡の百塚は、旧北条町長鳥地区夏渡に所在し、夏渡集落裏手で標高200mの丘陵頂点を中心に分布している。地元夏渡における百塚の伝承は、百塚の意味を伝えるものではないが、一種の禁忌的な伝承が伝わっており、百塚そのものについて地元でかなり以前から知られ、それなりに地域社会にとけ込んでいたと考えられる。この百塚が、埋蔵文化財という遺跡として登録されたのは、昭和48年に新潟県教育委員会へ提出された遺跡カードである。それ以後『昭和54年度新潟県遺跡地図』(県教委　1980)等に記載され、周知化されていった。しかし、本百塚に関する調査や研究等は、基本的にはほとんど何もされず、謎に包まれたまま現在に至っていた。

昭和60年東京電力㈱は、柏崎・刈羽原子力発電所１号基を完成し、営業稼動させた。これに先立つ送電線第１ルート建設に際して、昭和57年に市内北条地区深沢に所在する「国光の塚群」の発掘調査が実施されている(市教委　1983)。東電は、送電線第１ルートを完成させると間もなく第２ルートの建設準備に着手し、埋蔵文化財に関しても昭和61年内には県教委と協議を開始していた。市教委に対し、東電から埋蔵文化財包蔵地（遺跡）について問い合せがなされたのは、昭和62年８月20日に至ってのことであった。

市教委は、東電の要請に従って、８月24日、市内東長鳥地区夏渡の送電線鉄塔建設予定地の現地確認を実施した。その結果、当該予定地内は、三叉状を呈した列状に分布する夏渡の百塚北端にあたり、少なくとも２基の塚が予定地内に存在することが確認された。その後間もなく工事範囲は鉄塔の敷地のみでなく、その周辺を含めた約3,000㎡が対象になることが判明し、当該工事範囲内に所在する塚は、合計５基に達することが明かとなった。

夏渡の百塚は、市内最大級の塚群であり、現在までに消滅した塚も、盗掘坑もほとんどなく、保存状態の良好な塚群であること、また塚群の構成が特異で学術的にも重要性が認識されるところであった。しかも、鉄塔建設予定地が、一支群の北端に相当しており、数十m北側に鉄塔の中心を移すことによって、本百塚を現状のまま保存できる可能性があった。市教委は文化財保護上、これらのことを念頭におきながら、東電に対し鉄塔建設予定地の変更が可能かどうか、再検討を申し入れながら協議を進めることとなった。しかし、東電としては予定地の変更が建設計画全体に関わり、諸般の事情もあることから、変更は不可能とされた。そこで、工事範囲内に位置する５基の塚に対し、可能なかぎり現状保存をしていくことで協議を進めた。その結果、鉄塔建設敷地内の１基と、敷地に接するもう１基の計２基については、工法との関係で現状のまま保存することができないが、その他３基については現状を損なわないような工法で工事を実施し、現状保存していくことで合意した。

昭和62年２月10日付け柏刈発62第12号により、文化財保護法第57条の２の規定に基づく事業計画が、東京電力㈱柏崎刈羽工事事務所長から文化庁長官宛に届出がなされ、市教委はこれに

意見書を添付して進達した。昭和62年２月29日付け教文第1090号により、県教委から塚２基の発掘調査と塚３基の現状を損なわないよう充分配慮すること等の通知が東電へなされた。

以後、発掘調査等にかかる具体的な協議を行い、調査は、柏崎市教委が主体となって昭和63年５月から６月に実施することとなった。発掘調査は、５月連休明けには着手するということで、文化財保護法第98条の２の通知を昭和63年４月７日付けで提出した。東電との契約は、事務手続き等の関係で昭和63年４月26日となり、その後諸準備を行ない、昭和63年５月９日から発掘調査に着手した。

2　発掘調査の経過

発掘調査の現場作業は、昭和63年５月９日から同年６月16日までの29日間にわたって実施し、調査面積は、周辺部の平坦地等を含めて延約350㎡を発掘した。

５月９日、器材準備を行い、現場への搬入を行った。10日も、機材の搬入を継続したが、一先測量等に必要なものを中心とし、他は順次搬入するものとして、杭打ち及びグリットを設定し、測量に着手した。測量は、塚及びその周辺部の工事予定範囲全体を対象として、14日まで実施した。しかし、尾根の斜面下方までには至らなかった。測量中は天候に余り恵まれず、雨・風・霧に悩まされる日々であった。

５月16日、地元夏渡の方々を中心とする作業員が本日から参加、先ず能満寺住職大宗謙功氏からお祓いと調査の安全を祈願して頂く。作業は、調査地区の下草及び腐葉土等を完全に除去することから着手、同時に排土のための土留め柵を設定した。17日もこれらの作業を継続するとともに、第13号塚の第Ｉ層表土層の発掘に着手し、これを終了させた。

５月18日、第12号塚の第Ｉ層を、また13号塚の盛土約30㎝を発掘した。19日から20日にかけては、第13号塚を調査した。周溝及び平面プランを確認し、さらにＤ－７Ｇ（グリット）全体を地山まで掘り下げ、ピットを数基検出した。盛土層は、更に10㎝ほどを掘り下げたが、実際には掘りすぎ基底部に達していたこと、また周溝部は周溝というよりもカッテングされたままのニュアンスが強いことが判明した。24日には塚盛土の断面を撮影し、図面を作成した。なお、Ｄ－７⑲から石槍が出土した。

第12号塚は、５月24日から調査を再開、６月６日まで継続した。24日では、第Ｉ層直下からガラス製のおはじきが１点、第３区の旧表土層（第II層）からは縄文土器が出土した。25日は、盛土上層の発掘を若干行ない、またＤ－６Ｇの塚周辺の地山を検出し、本塚の平面プランを明確にした。26日には基底部の検出作業を実施、塚の原形を検出する作業を試み、27日もこれを継続した。基底部の検出とは、地山カット面に堆積した覆土を発掘することだが、塚盛土の流れ込みも多く、検出作業には困難を伴った。30日には、概ね原形を検出したため、写真を撮影後、盛土層の発掘に着手した。基底部の上面の検出は、31日となった。この際、第II層の旧表土上面での検出を意図して作業を行なったが、色調が微妙で結局地山面での検出とした。６月１日には基底部の検出を終了し、６日までに盛土断面の観察や記録作業を行なった。

セクションベルトの発掘は、第13号塚については6月1日に、第12号塚については6月7日から8日にかけて実施し、各々完掘した。

塚周辺部の調査としては、D－6GからE－6Gにかけて検出された焼土遺構が掲げられる。本遺構は、5月25日にD－6G東側から覆土に焼土を含む遺構の一部を検出し、更に南東に伸びることからE－6G側へ発掘を拡張したものである。26日には、E－6G内の遺構確認面まで発掘が進行した。確認された平面形態からは、炭窯の可能性も出てきた。しかし、焚口や、作業場等がE－7Gへも伸びるのか、未検出であったため南東側へ更に拡張することとして、27日から拡張作業に着手、31日まで継続したが、E－7Gまでは至っていないことが判明した。6月1日から遺構の発掘を開始し、9日まで継続した。その結果、焼土やカーボン粒が多く検出されたものの遺物はなく、また焼壁も明確でないことなどが判明し、木炭の出土もほとんどないため、炭窯等として利用されたとは考えにくいことが確認された。本址の調査は、15日ま

第1図　発掘調査スナップ

で継続したが、その性格等を明らかにする遺物等は全く出土しなかった。

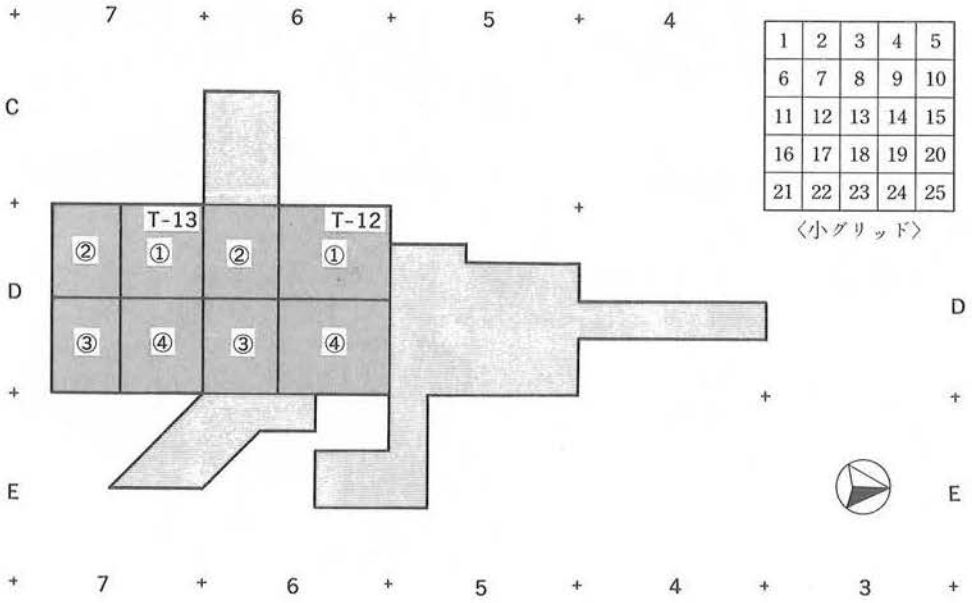
この他周辺地区の調査は、6月1日から6日までD－5Gの発掘を行ない、7日から14日まではC－6・D－4・E－6の各グリットの発掘を行なった。またピット等の小遺構については、10日から14日まで実施し、15日には図面の作成も終了した。

6月15日は、若干の残りについて調査を終了させ、発掘調査現場作業を完了した。調査区内の比較的深いところを埋め戻し、それと平行して器材の撤収作業を行ない、16日は器材等すべての搬出を終了した。

3　調査区の設定

調査区は、塚の構築された尾根稜部を中心に、10m区画の大グリットを設定し、西から東へA・B・C‥‥、北から南へは1・2・3‥‥とした。小グリットは、10m区画を2×2mの区画に細分し、西から東へ①・②・③‥‥とし25個を設定した。グリットは、D－5⑧G（グリット）等と呼称することとした。

以上は、調査区全体におけるグリットの設定であるが、塚の調査ではセクションベルトとの関係もあって、グリットとは異なる呼称を使用した。その特別区とは、D－6、D－7の2グリットで、セクションベルトで区画された4区であり、T－12③（第12号塚3区）と表記し、場合によっては両方の呼称を併用した（第2図）。



第2図　調査区設定概念図（1:400）

II 環　　境

1　地理的環境

新潟県の中央西部に位置する柏崎（刈羽）平野は、鵜川と鯖石川及びその支流別山川・長鳥川を主要河川として形成された臨海沖積平野である。平野部は、米山・黒姫山・八石山を頂点とする山地や丘陵（東頸城丘陵）によって三方を囲まれ、北西部を日本海に開口する。沖積地の海岸沿いには荒浜砂丘が発達し、その後背地には湿地性の低地が広がる。丘陵の縁辺には中・高位段丘が形成され、その下位は沖積地に没している。

柏崎平野を中心とする地形は、北流する２大河川、鵜川と鯖石川とによって西部・中央部・東部に大きく三分できる。西部は米山山塊を中心とした山地である。山塊から流出する河川は小規模で、沖積地の形成は少ない。山地・丘陵は海岸まで迫まり、沿岸に中・高位段丘が分布する。中央部は、黒姫山を頂点とするもので、北へ徐々に高度を下げ、丘陵先端から沖積地に没する安田周辺には広い中位段丘が形成される。鯖石川と鵜川の両河口に挟まれた海岸部は、標高10m前後の砂丘があり、砂丘と丘陵との中間は後背湿地としての沖積地が広がる。この一帯は、両河川の河口が閉ざされたとき湛水して、鏡ケ沖と称される湖沼ができたといわれているところである。

北流する鯖石川以東の丘陵地帯は、褶曲構造に強く支配され、北北東―南南西方向の背斜軸に沿った丘陵が幾重にも形成されている。これらの支丘陵は、海側から西山丘陵・曽地丘陵・八石丘陵と呼ばれている。各丘陵の向斜軸に沿って、別山川・長鳥川が鯖石川に、また島崎川・黒川・渋海川が信濃川に合流し日本海に注いでいる。

夏渡の百塚は、曽地丘陵と八石丘陵との間、長鳥川と黒川との分水嶺上に位置する。標高は約200mを計り、周辺より若干小高くなっていた（第４図・図版２―１）。

2　歴史的環境

柏崎平野及びその周辺に分布する遺跡は、鵜川・鯖石川等の流域を中心とし、中位段丘や河岸段丘、自然堤防、砂丘及び丘陵内に立地している。時期的には、縄文時代から近世までの遺跡が主体で、旧石器時代から縄文時代早期までは明確な遺跡が少ないのが現状である。

夏渡の百塚から出土した遺物は、縄文土器のほか遺物がなく、従って塚の時期も不明である。しかし、塚あるいは塚群は、中世以降の築造と考えられている。本節では、夏渡の百塚遺跡に関わる時期として、縄文時代・古代～近世について、長鳥地区を中心に述べることとする。

縄文時代　長鳥川は、小規模な河川であるため、流域には河岸段丘等の発達がほとんど認められない地域である。このため立地という環境に恵まれなかったためか、縄文時代の遺跡は少なく、しかも小規模なものに限られている。長鳥川中・下流域においては、中期初頭で尾根上に立地する国光の塚群遺跡（市教委　1983）や、沖積段丘上に営まれた後晩期の引地Ａ遺跡（山

本・宇佐美　1987b）がある程度である。これに対して、上流域では、丘陵内に夏渡・谷地遺跡（品田　1988)、池の端遺跡・倉下遺跡（柏崎市史編さん委　1987a）が確認されているが、すべて実態が明らかでなく、規模もそれほど大きいものではない。このような状況の中で特に注目されるのは、夏渡・谷地遺跡である。本遺跡出土土器は、未だ時期が確定していないが、早期終末から前期初頭頃と考えられ、市内でも古い資料を提供している。この土器は、北陸地方の「佐波式土器」に類似するとともに東海・関東地方の要素も見受けられ(註1)、当該期を理解する上で貴重な資料である。長鳥川上流域から黒川上流域にかけては、なだらかな丘陵が広がっており、同様な遺跡の存在を示唆する点でも重要である。

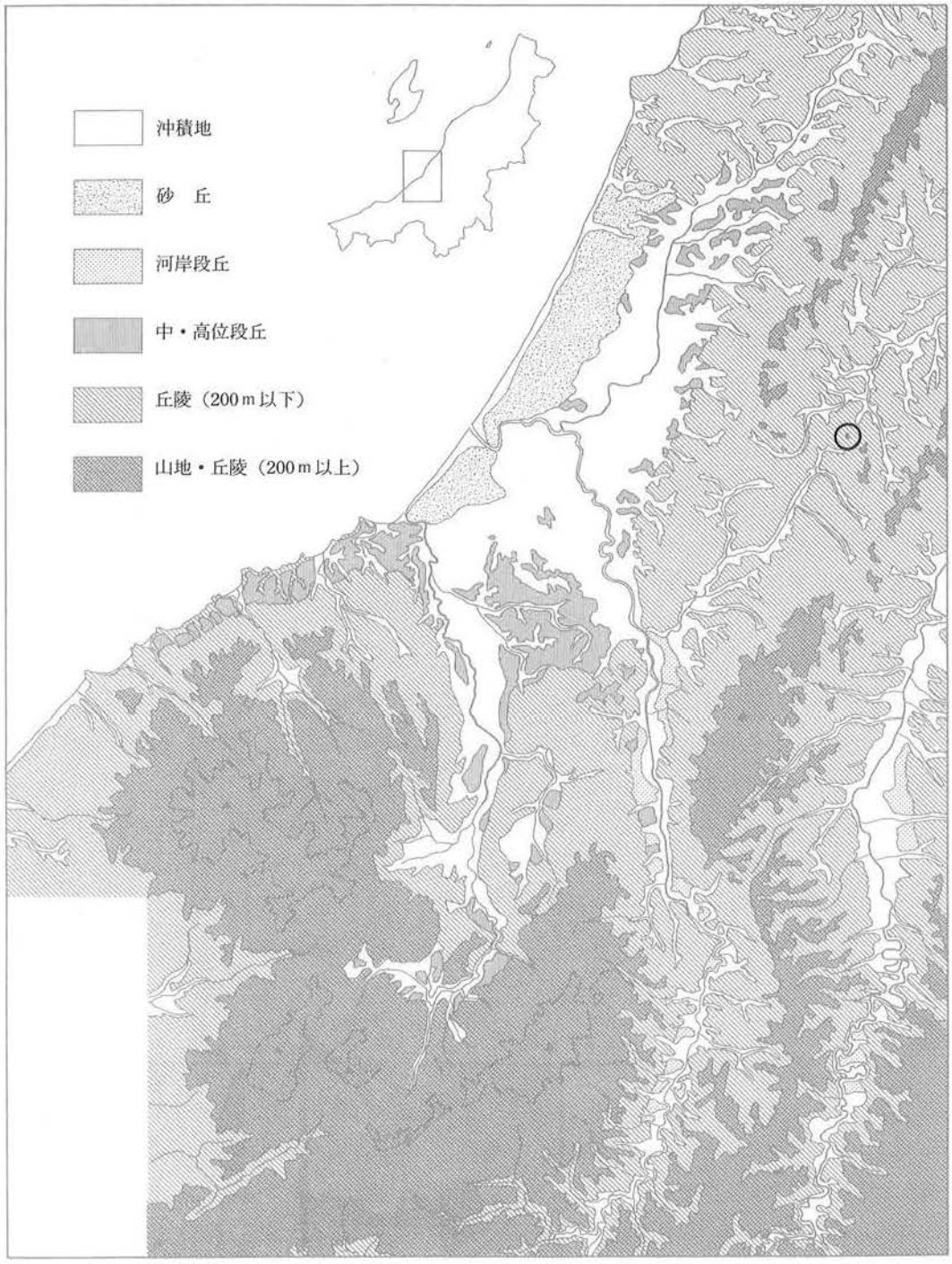
古　　代　現在の柏崎市（合併による旧頸城郡域を除く）と刈羽郡（小国町を除く）は、当初古志郡としてその郡域にあったが、9世紀初頭に三嶋郡として分置独立したとされている(米沢　1980)。柏崎（刈羽）平野は、地理的にも山地丘陵によって囲まれ、古志郡の所在する信濃川流域とは独立した水系によって形成される。このような環境的事由による分立は当然考えられるところである。

三嶋郡域に所在する郷としては、『倭名類聚抄』に「三嶋」・「高家」・「多岐」の三郷が記載され、『延喜式』記載の駅順から、ある程度郷所在地が推定される。現状としては具体的根拠に乏しいため、断定するには無理があるが、一応の郷域を比定すれば、鵜川流域：三嶋郷、鯖石川中流域・長鳥川流域：高家郷、鯖石川下流域・別山川流域：多岐郷とすることができる。このような推定が正しいとすれば、夏渡の百塚が所在する長鳥地区は、三嶋郡高家郷であった。

古代における官道北陸道は、別山川流域から島崎川流域に至る内陸ルート説が有力で（木村1986)、高家郷内はほとんど通らない可能性が強い。しかし、三嶋郡から古志郡あるいは魚沼郡へ通じる地域間交流の主要道路は存在しただろうことは想定できる。長鳥地区は、長鳥川流域から古志郡である黒川流域(註2)へ抜ける交通路であったとすることができるのではないだろうか。

高家郷の一部と推定される長鳥川流域の古代遺跡は、下南条遺跡（南条)、亀の倉遺跡（南条)、清八遺跡（北条)、老崎遺跡（西長鳥)、岳の下遺跡（西長鳥）が確認されている（柏崎市史編さん委　1987a)。しかし、発掘調査は一切なされておらず、比較的遺物がまとまって採集され、時期がある程度把握可能なのは、亀の倉遺跡（9世紀後半～10世紀）くらいである。長鳥地区に所在する2遺跡の実態も明らかでなく、当該地区の古代を概観するのは難しく、交通路の問題も含め今後の課題と言えよう。

中　　世　古代に三嶋郡と呼ばれた柏崎（刈羽）平野一帯は、中世にはいると荘園名等で標記され、古代に使用された呼称は廃れてしまう。『吾妻鏡』文治2（1186）年3月12日条には、「佐橋庄」・「比角庄」・「宇河庄」の3荘が記載されているが、各荘とも荘域や実態については不明な点が多い。「宇河庄」はその名称から鵜川流域を中心とし、「鵜川庄内安田条」と記載された史料があることから安田周辺にまで荘域が広がっていたものと考えられ（金子達　1975)、三嶋郷に近い荘域が想定可能である。比角荘は、『師守記』貞治3（1364）年6月18日条にも記載されるが、具体的なことは全く不明である。ただ比角という地名から現柏崎市街地の砂丘か



第３図　柏崎平野地形分類図

No.	遺跡の名称	時代・時期	No.	遺跡の名称	時代・時期
1	夏渡の百塚遺跡	縄文前期後半	11	亀ノ倉遺跡	古墳前期～平安時代
2	夏渡・谷地遺跡	縄文早期末～前期初	12	下南条遺跡	古代～中世
3	池ノ端遺跡	縄文後期（？）	13	南条館跡	鎌倉時代（？）
4	倉下遺跡	縄文時代前半（？）	14	北条館跡	鎌倉～室町時代
5	岳ノ下遺跡	古代～中世	15	北条城跡	鎌倉～室町時代
6	老崎遺跡	中世～近世	16	八方口城跡	中　世
7	引地A遺跡	縄文後期～晩期	17	山澗城遺跡	中　世
8	引地B遺跡	中　世	18	鳥谷ノ城跡	中　世
9	国光の塚群遺跡	縄文中期前半	19	吉井黒川城跡	南北朝時代（？）
10	清八遺跡	古代～中世	20	夏渡館跡	中　世（？）

第1表　長鳥川流域の遺跡地名表（塚を除く）

ら後背地にかけて、荘域としていたものと推定される(金子達　1976)。佐橋荘は、鯖石川中流域及び長鳥川流域一帯が考えられ、古代の高家郷にも似た荘域が想定される。文書の上では、「南条」・「北条」が確認される（柏崎市史編さん委　1987b）。なお、多岐郷に相当する荘園は、史料上では確認されていない。比角荘の荘域にあった可能性もあるが、『明月記』正治元(1199)年9月22日条及び正和2（1313）年の「源光弘和与状写」（市史No.29）には「苅羽郷」の記載があり、これが中世前期における別山川流域の呼称であった可能性もある。因みに「苅羽郡」の初見は延文2（1357）年、「かしはさき」は建治2（1276）年である。

長鳥地区は、長鳥川流域であることから佐橋荘内にあった可能性が強いが、史料的には確認できない。史料上では、康正3（1457）年の「北条広栄寺領寄進状写」（市史No.78）の「永鳥条」が唯一あるのみである。これには、荘園名の記載がないが、北条氏の支配領域にあったことは確かであり、北条氏が佐橋荘を基盤とした勢力であることから佐橋荘内にあったと考えて良いであろう。この史料中には、「なかむね名」・「あさうひら」・「三百苅ひこた」という地名が掲げられるが、現地比定はされていない。

佐橋荘は、鎌倉時代初期には一条天皇領、室町時代初期には万寿寺領であった。この荘園に勢力を持った北条氏は、13世紀半ばに佐橋荘南条の地頭職に補任された毛利季光が、南条館に居を構えたことに始まる。以後、北条館に居を移し、漸次荘園を侵略、在地土豪化するとともに長鳥川流域一帯も支配領域に組み込んでいったものと考えられる。

長鳥川流域における中世の遺跡は、城館跡と集落等居住遺跡に大別され、この他に塚（群）が確認されている。

城館跡では、北条毛利氏の本拠地である長鳥川下流から鯖石川右岸に多く築かれている。南条及び北条館は平地に築かれ、要害としては北条城を中心にその支城が山澗城まで伸びている。長鳥地区では鳥谷ノ城が地区中央に築かれているほか、夏渡の長者屋敷と称するところにも館

第4図　長鳥川流域の遺跡分布図（1：50,000）

跡があったといわれているが、その詳細は不明である。

集落跡等については、ほとんど確認されておらず、14～15世紀の青磁や珠洲焼が採集された旧広田の引地B遺跡（宇佐美・山本　1987a）が知られるのみである。長鳥地区は、史料上の「永鳥条」と考えられ、15世紀前半からそれ以前に集落等の成立を推定できるが、すべて今後の課題である。

近　　世　長鳥川流域は、文化元（1804）年頃成立とされる『白河風土記』によると、「刈羽郡鯖石庄北条郷」と称され、南条村・北条村・小島村・山澗村・広田村・長鳥村の六ヶ村からなっていた。夏渡の百塚が所在する長鳥村は、幾つかの小集落から成り立っている。この状況は、大字が東長鳥と西長鳥に別れている以外は現在とほとんど変っていない。各小集落と戸数は第2表のとおりであるが、現小集落名にないものが二ヶ村、また存在しながら記載されていないもの一ヶ村がある。前者は市野口と浦村であり、後者は十二ノ木である。

これらを確かめるものとしては、天保6（1786）年の「長鳥村絵図」（柏崎市立図書館蔵）がある。これによると、現平沢は、市野口の端村であり、本村は杉野入から大角間へ向かう途中にあった。また浦村は山本の東側に記されていることから、現在は山本もしくは中村に含まれてしまったものと考えられる。十二ノ木については岩野入の端村と記されている。

小集落名	戸　数
中　村	22
山　本	29
浦　村	15
花　田	24
竹之下	16
岩野入	75
大角間	65
杉野入	27
市野口	14
峠	15
夏　渡	27
鷹ノ巣	28
計	357

第2表　長鳥村の小集落

各小集落の規模を『白河風土記』から観ると、高札場が中村にあるものの、戸数60軒を越えるのは岩野入と大角間であり、ついで戸数30軒前後の山本・杉野入・夏渡・鷹ノ巣の四集落が続いている。長鳥村は、天和3（1683）年の水地帳によれば、耕地の大半は山畑であり、その生産性はそれほど高くないことが容易に推測できる。そのような状況下にあって、夏渡、鷹ノ巣の各村は比較的大きな集落を形成していたとすることができる。全国的にも、また本県でも江戸中期以降における山野の開発が著しかったという事象が認められるように（田中　1987・丹羽　1987）、当該地区でも同様のことが想定され、そのための苦労も一塩ではなかったと考えられる。

また、それとともに市野口の盛衰から窺えることは、交通路という問題である。長鳥村における主要道として考えられる道程は、岩野入や大角間から塚野山方面に抜けるルートと、杉野入から市野口を通り、夏渡、鷹ノ巣から大積方面へ至るルートである。後者のルートは18世紀後半には、現平沢を通過するものへと変更したのではないだろうか。この想定が正しければ、市野口の盛衰に係る要因の一つが理解されるだろう。このルートの変更は、夏渡や鷹ノ巣への影響はほとんどなく、両集落がある程度の戸数を維持できた理由の一つに、交通路という要因が考えられるのではないだろうか。ただし、史料的確認は今後に残された課題である。

註1　四柳嘉章氏から御教述及び資料等の提供を受けた。
註2　古志郡栗家郷か

III　調査の概観

1　基本層序

夏渡の百塚発掘調査地点における基本層序は、第Ⅰ層から第Ⅳ層に大別される。層序にはこの他に、塚盛土の第O層及び塚盛土の流出土や遺構覆土があるが、これらは遺構各説において述べたい。

第Ⅰ層は、表土層である。層厚10cm程で塚盛土や調査区全域を覆う黒褐色腐葉土層であるが、大半は草木の根等である。

第Ⅱ層は、塚構築以前の旧表土である。褐色を呈し、縄文土器の包含層でもある。本層は、基本的には塚の盛土にほとんど使用され、残在するのは塚基底部や調査区縁辺の斜面である。

第Ⅲ層は、地山と第Ⅱ層との漸移層で、暗茶褐色を呈する。本層も第Ⅱ層同様の残存状況であるが、基底部では土厚のためか第Ⅱ層も薄くなっているのと同様に、本層は顕著でない。

第Ⅳ層は、新第三紀の地山層である。褶曲作用によってか水平堆積でなく層厚は一定しない。上層（第Ⅳａ層）は、暗黄褐色土で若干粘性を帯び、硬くしまっている。下層（第Ⅳｂ層）は、黄褐色砂質土であった。

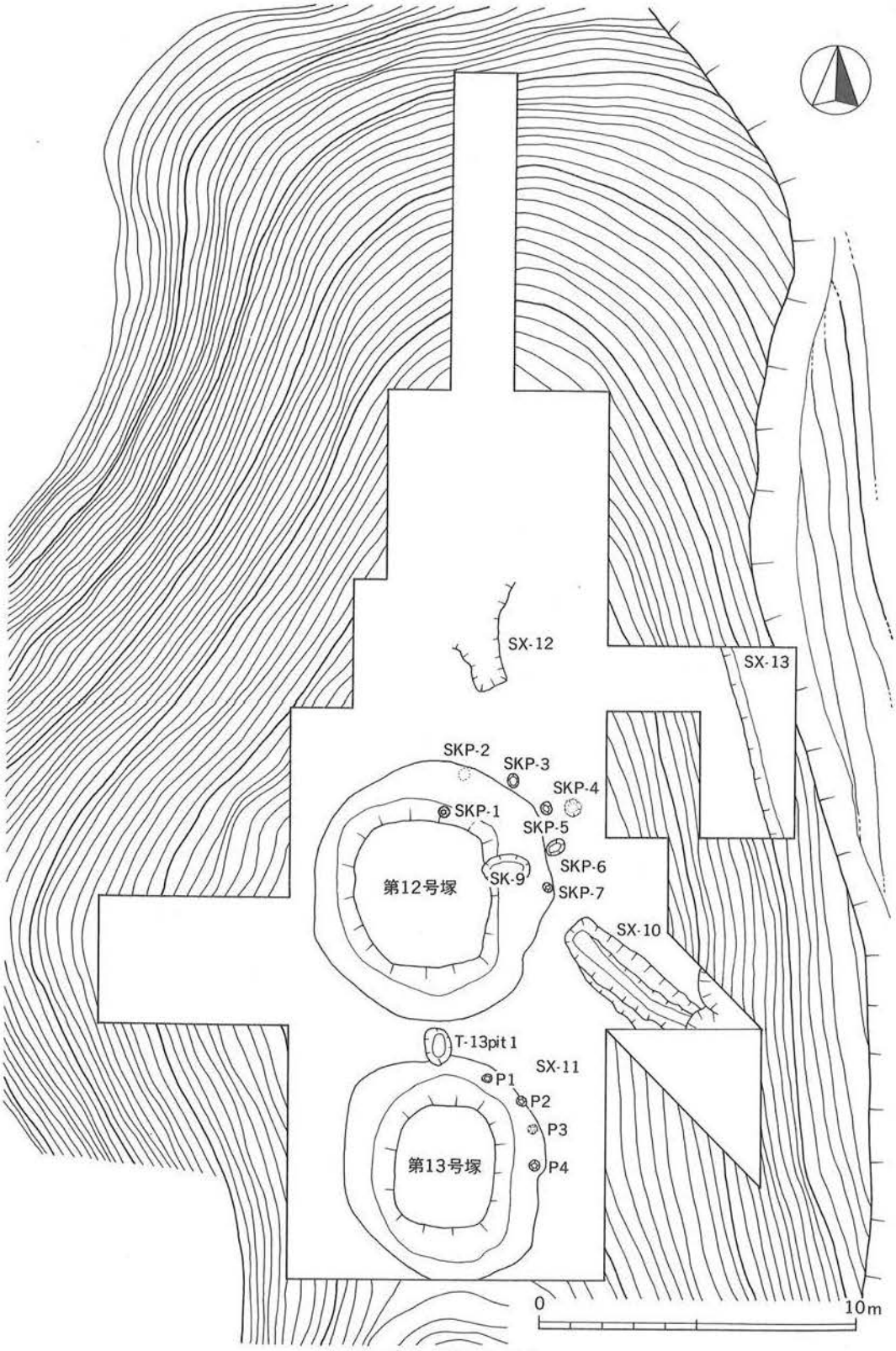
2　調査区の概要

検出された遺構は、第12号・第13号塚の基底部のほか、縄文時代の土坑やピット、時期不明のピット群、焼土遺構及び性格不明の不整形な落ち込み等がある。

第12号塚は、D－6グリット、第13号塚は、D－7グリットに位置する。調査は、第12号塚の北側の平坦地（D－5グリット）も調査の対象とし発掘した。これは、第2号塚の構築位置のように、尾根先端の急斜面際までを利用して塚を構築しているのに対し、少なくとも塚1基を構築可能なスペースを残していたからである。しかし、調査の結果は、不整形な落ち込み1基（ＳＸ－12）を検出し得たのみであった。

縄文時代については、遺物は各塚の基底部上の第Ⅱ層から少量づつ、また東側斜面からも数片の出土があったが、遺構はD－6グリットを中心に検出された。縄文時代と判断される遺構は、土坑1基と6基の小ピットである。しかし、遺物を伴うのは、ＳＫｐ－6・ＳＫ－9の2基のみであった。ＳＫ－9は、楕円形のやや大形の土坑であるが、覆土が若干の赤味を帯びていたため、炉址の可能性を考慮したが、確認には至っていない。

遺物の出土がなく時期を確定できない遺構としては、D－6～7グリットの調査区東側斜面から検出されたＳＸ－10、第13号塚北東側から検出された4基のピット群等が掲げられる。前者の焼土遺構は、木炭片及び焼土塊が多く出土した以外に遺物がなく、当初登窯形式の木炭窯と想定したが、結局性格を明らかにできなかった。


SX-12
SX-13
SKP-2
SKP-3
SKP-4
SKP-1
SKP-5
SKP-6
SK-9
SKP-7
第12号塚
SX-10
T-13pit 1
SX-11
P1
P2
P3
P4
第13号塚
0
10m

第5図　調査区全体図

Ⅳ 百　　塚

1　立地と現状

立地と景観　夏渡の百塚は、柏崎市大字東長鳥乙の夏渡地内に所在し、水ケ谷(甲)、小日影（甲)、三俵刈（甲・丁）の４小字に跨りながら分布する。合計64基の塚が確認され、実数の確認されているものとしては市内最大である。(註1)

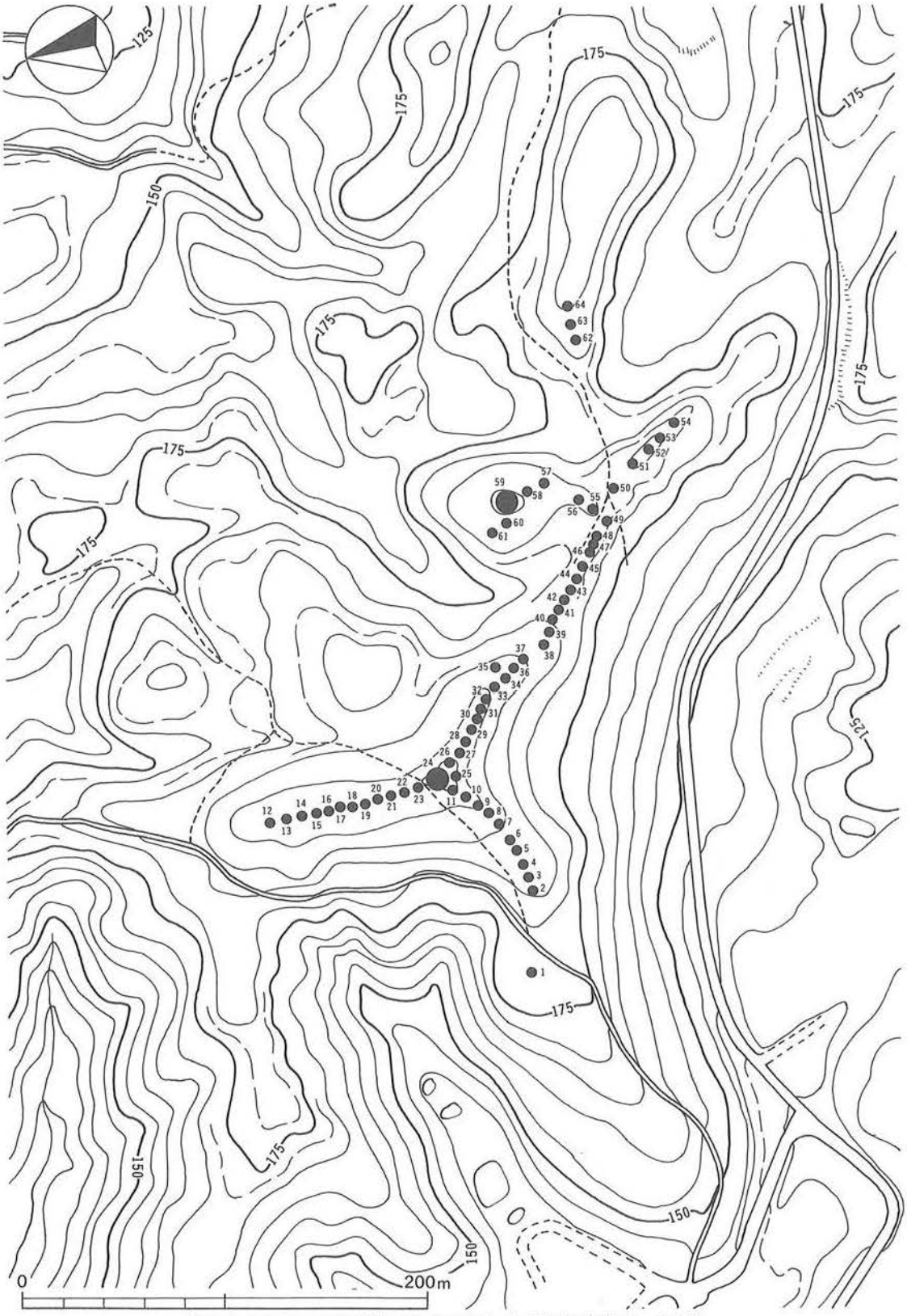
百塚が立地する標高200mほどの小山は、南南西―北北東の向斜軸に沿う曽地と八石の各丘陵を結ぶ尾根頂部の一つであり、両丘陵の中間にあっては独立したものとなっている。周囲を取り巻く標高140m～180m程の丘陵は、長鳥川と黒川の水源であり、多くの沢が形成されている。黒川は信濃川へ、長鳥川は鯖石川を経て、各々別個に日本海へと注ぎ、百塚の立地する屋根線が両水系の分水嶺でもある。

百塚が立地する通称「イボ山」(註2)は、周囲より小高いため、かなり眺望の利く場所である。両側は、丘陵によってさえぎられるが、尾根上に構築された城郭は明瞭に臨むことができる。西には山澗城跡、東には桝形城跡が間近く、北にはやや遠く小木ノ城跡のレーダーサイトを見ることができる。また、山林にさえぎられ確認はできなかったが、南西には鳥谷ノ城跡、北条城跡が見えるはずである。更に、刈羽三山と称される米山や黒姫山、八石山のほか兜巾山、尾神岳の山々も臨むことができる。そして、この立地条件は、長鳥川や黒川の狭小な流域平野部もある程度見下ろすことが可能であり、逆に各流域における村落からも、視野の中に意識することもできたと考えられる。

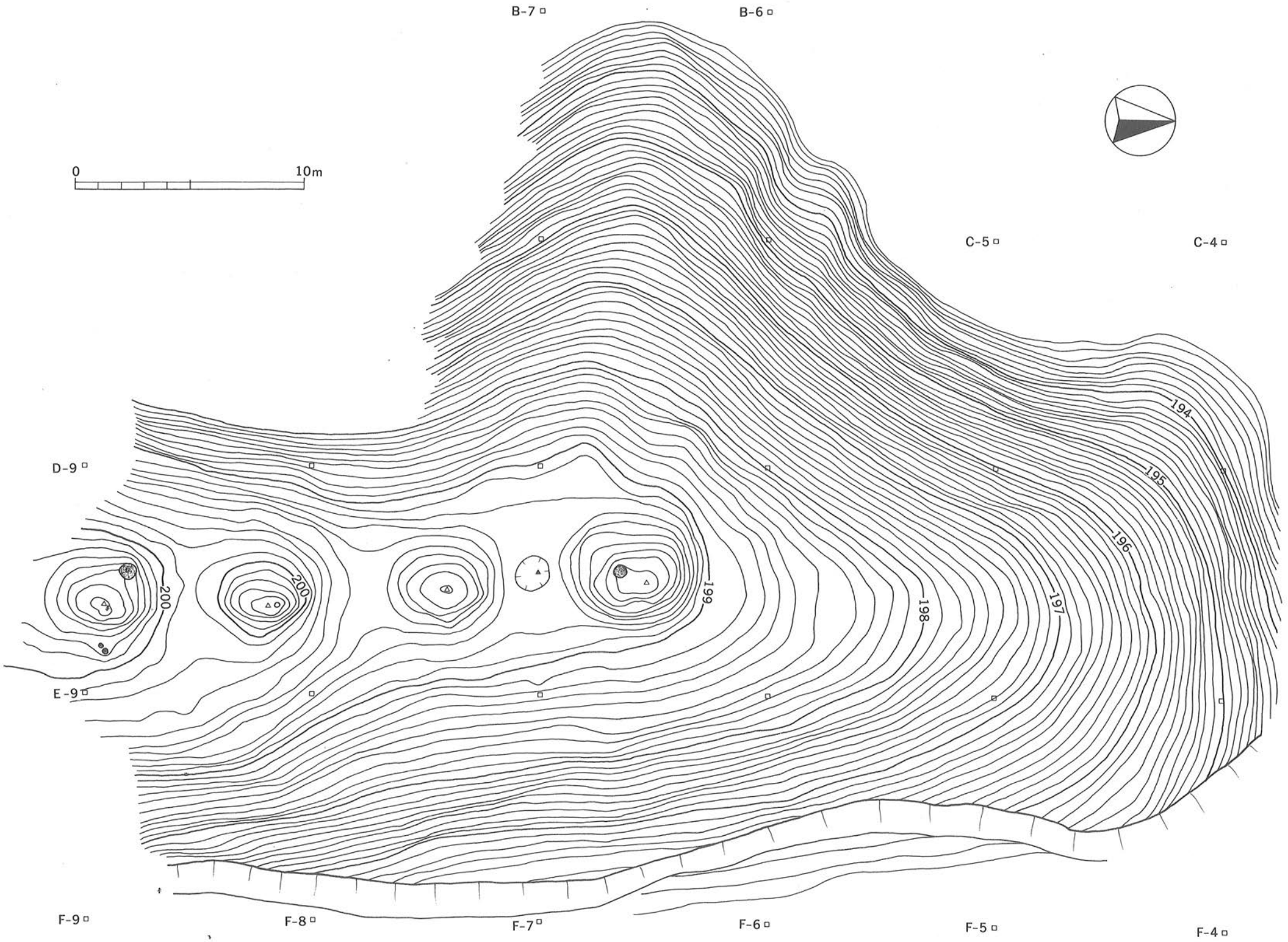
百塚の周辺半径１㎞程に所在する集落は、夏渡と鷹ノ巣の２つの集落である。両者は西と東に百塚を境に所在しており、両集落の関係で百塚が位置付けられると言うこともできないことはない。また、距離的にも夏渡に近く、その地籍内にあることからみても、関係が深いとすれば夏渡にあったといえる。しかし両者の境界は、夏渡の百塚よりも300m程鷹ノ巣寄りであり、向山の塚（柏崎市教委　1986）のような大字界に近い状況に擬すことはできないであろう。

百塚の概観　百塚の現状はすべて山林であり、以前にも畑等の耕作を受けたことのない塚群である。このため保存状態は極めて長好であり、ほとんど損滅がなく、確認された64基の塚でほぼ構成されていたと考えられる。ただし形状については、雨水等による風化や落葉等の腐葉土に覆われ、本来の姿とはかなり異なっていることが考えられる。風化等の特に著しいのは南西側であり、季節風等の影響を受けてか封土の流出が著しい。このため平面形の観察は、表面的ではかなり難しいが、北側や東側の形状及び既調査結果からいえば全て方形と考えられる。

第６図は、百塚が立地する地区を中心に塚の分布を示したものである。塚は、尾根頂部付近に位置する第24号塚を中心に三叉状の配列をなし、これに２支群が付随する。この構成は明らかに地形――尾根線を意識していたことが明瞭である。



第６図　夏渡の百塚分布模式図（1:3000）東京電力㈱提供に一部加筆

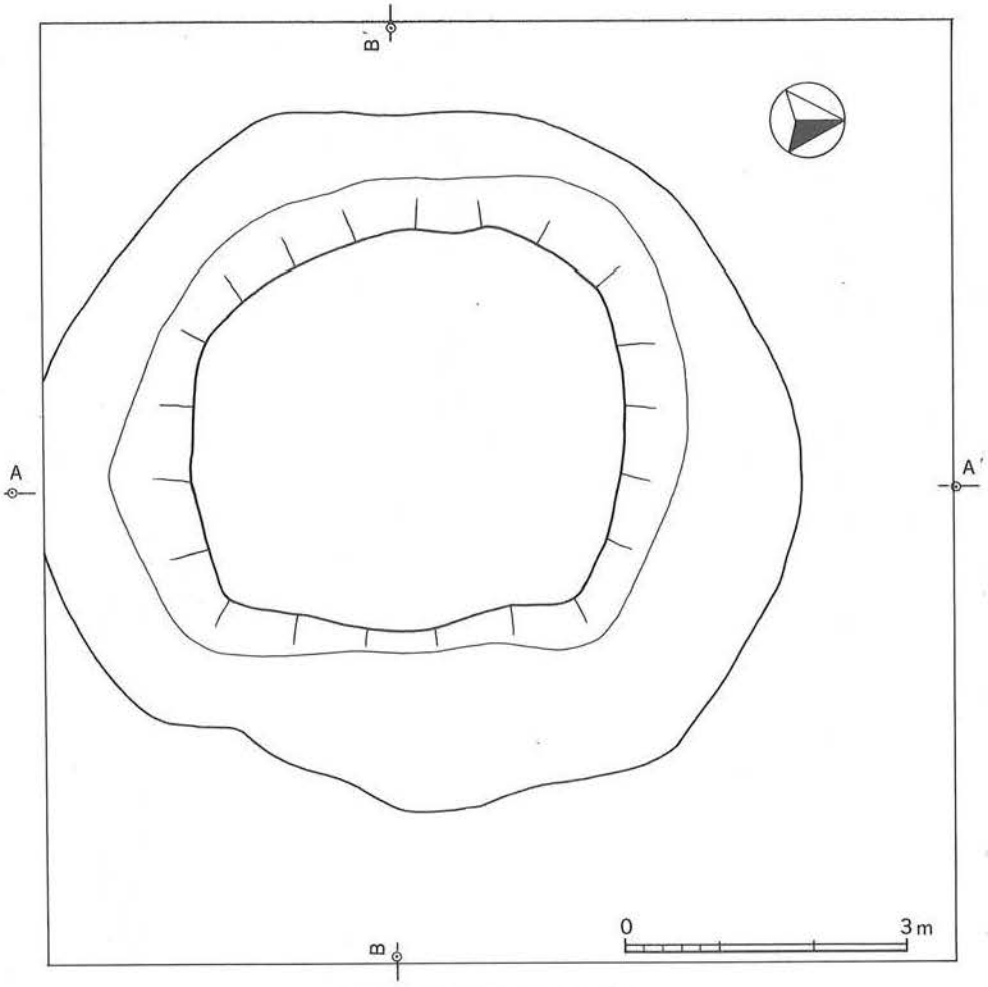


第７図　夏渡の百塚全測図

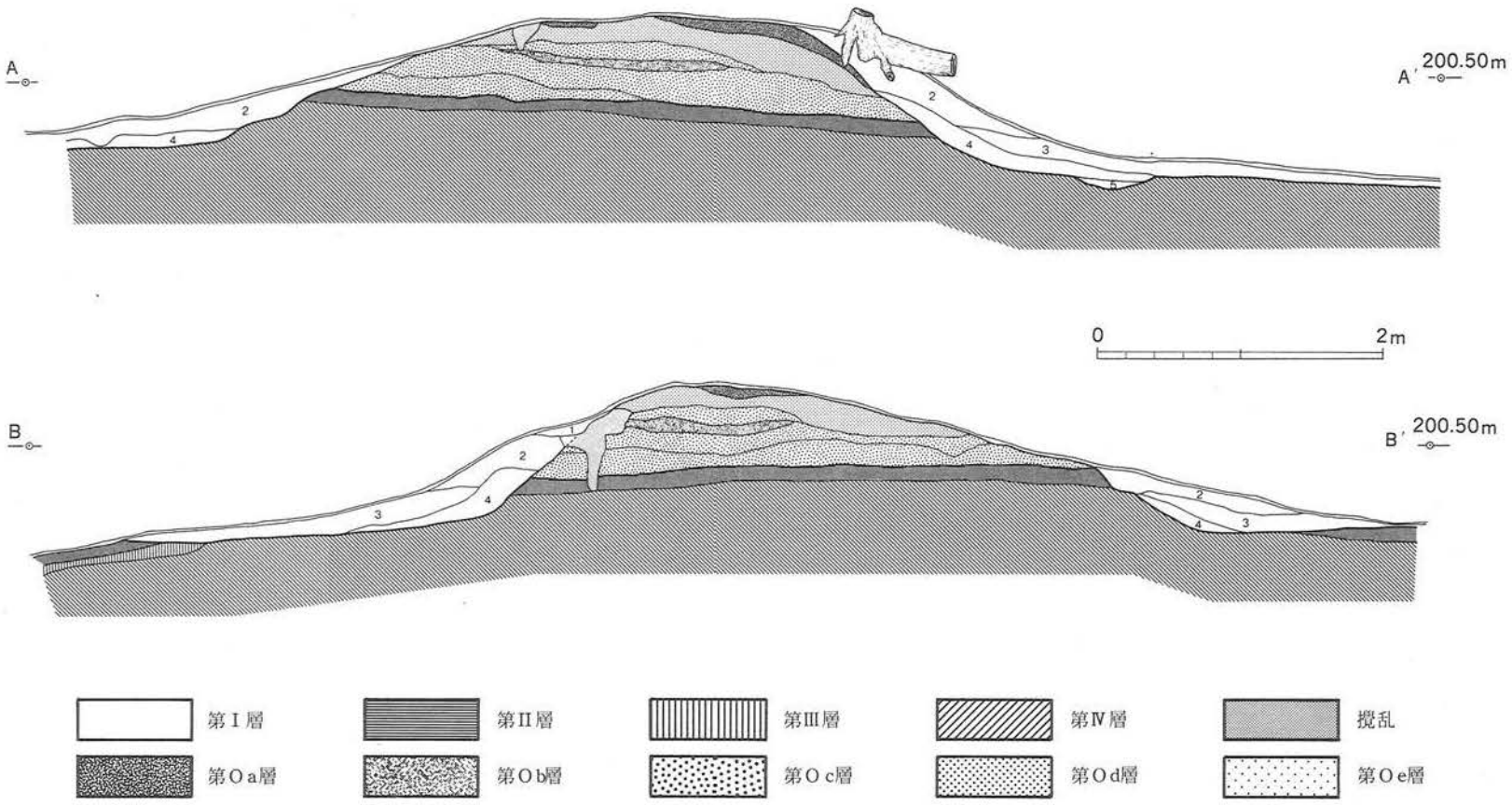
2　第12号塚

発掘前の形態は、南西側を中心にコンタが緩やかとなっていることが観察され、土砂の流出が他より著しい。平面形は、楕円もしくは長方形状を呈することが看取されるが、基底部のプランからうかがえば、長方形の各辺が比較的良好に残されていたことが分かる。

平面形態は、地山面において検出した基底部から、長方形を呈することが確認された。基底部は、尾根稜線を利用しプランの外縁を水平カットして削出している。基底部の規模は、その下端で長辺約6.10m、短辺約5.00mを測る。南北の主軸線はN—2°—Wを指向する。塚頂部までの高さは、約1.10mを測り、第II層から第IV層までを削り出した高さは約45cm、盛土部分は65cm程を測る。塚の断面形態は、緩やかな半円状を呈するが、基底部縁辺を埋めた覆土の量から



第８図　第12号塚基底部（1:80）



第12号塚覆土土層注

1　褐色土：腐木痕にたまった土砂　　2　褐色土　　3　黒褐色土　　4　暗茶褐色土　　5　暗茶褐色土：地山土との混土

第９図　第12号塚土層断面図（1:50）

すれば、かなり明確な半円もしくはそれ以上に高くなっていたことが窺える。

盛　土　塚本体の盛土は、周辺に堆積していた第II層から第IV層を削土したものである。第O層とした盛土層は、盛土の主体となった第II層の暗色系と第IV層の黄色系の土砂が混合する度合いにより区分したもので、第Oa層から第Oe層へ徐々に第IV層（地山土）の混入が多くなり、明色を呈する。本塚に最初に盛られた土砂は、第Oc層であり、プラン外縁をカットした土砂を盛ったものと考えられる。次いで、比較的量の少ない第Ob層と第Oc層を盛り、第Od層を盛っている。最上部に盛土されているのは、第Oa層の第II層が主体の盛土層である。ただし塚裾部外縁を埋めた覆土は、最下層の第4層が暗茶褐色であり、最終的に塚頂部が第Oa層で覆われていたかについては明確でない。ただ、覆土第3層は、黒褐色土とかなり黒い層であり、塚頂部の第Oa層の上は、それほど高くは盛られていなかったと考えられる。

なお本塚の盛土は、全体的に基本層序第II層の褐色土が多く、暗色系の封土で構成されていた。

基 底 部　基底部は、第II層と第IV層とによって基本的に構成される。調査に当たっては、第II層上面を検出し、基底部の全貌を確認するよう心掛けたが、盛土第Oc層と第II層との区分が難しく、層位的に発掘できず、第IV層の地山上面で検出した。盛土最下部層から第II層にかけての発掘に際しては、有機物による遺物の検出にも心掛け、またセクションベルトの発掘に際しても第II層上面に注意したが、結局何も確認することができなかった。

基底面第IV層上面における遺構確認は、一部サブトレンチによって確認したが、本塚に伴なうピット等は確認されなかった。

3　第13号塚

調査前の外観は、塚頂部がやや扁平で高さがなく、全体的に明瞭な形態を呈していなかった。特に盛土層の流出が著しく、平面形も円形状を呈していた。

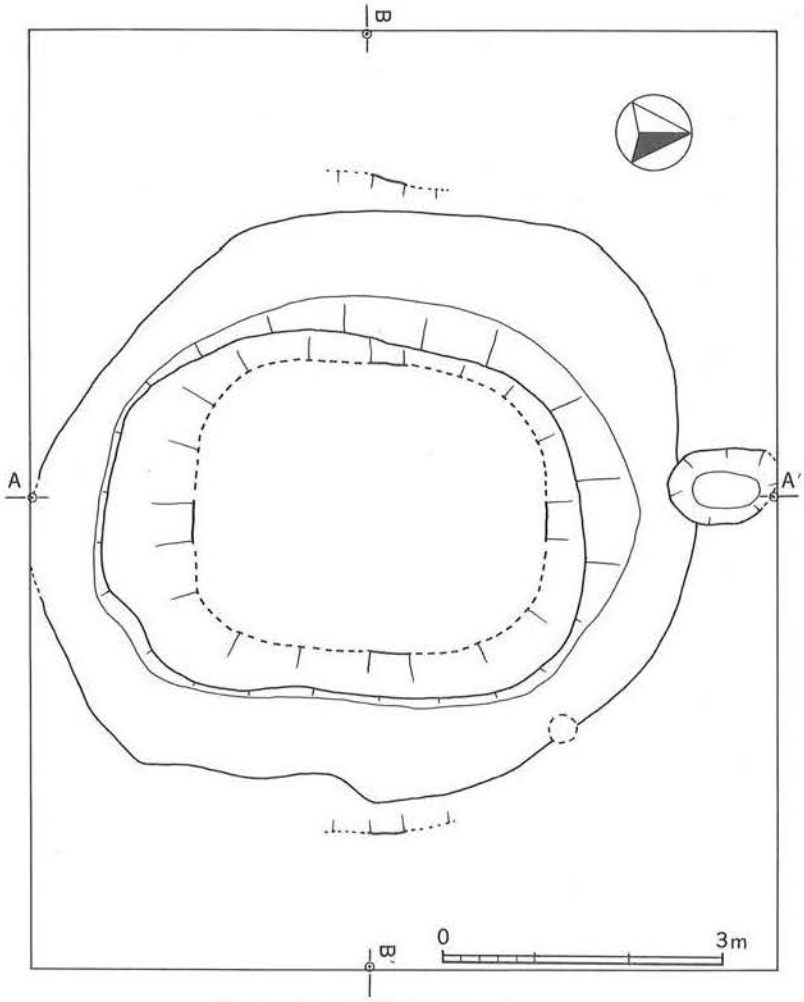
平面形態は、地山面において確認した基底部から、長方形を呈することが確認された。調査前のプランが円形に近かったのは、塚の長軸が尾根線に沿い、東西の両側面が斜面となって、封土の流出した範囲が南北面よりも広がっていたためである。基底部は、第12号塚と同様に尾根稜線を利用し、表土上に設定したプランの外縁を、水平にカットして削出したものである。基底部の規模は、下端における法量で、長辺約5.80m、短辺約4.35mを計る。南北の主軸線は、N－3°－Eを指向し、前述の第12号塚とは若干のずれがある。

塚頂部までの高さは、約88cmを測るが、盛土の部分は最大40cmでしかなく、半分以上の48cmは削り出した基底部であり、盛土の土量は意外に少なく済ませていることが判明した。塚の断面形態は、プランが長方形であることから長軸に沿って塚頂部が平坦であるが、短軸では緩やかな半円状を呈していた。しかし塚裾部の覆土は比較的厚く、現状より数十cmは高かったと推定される。

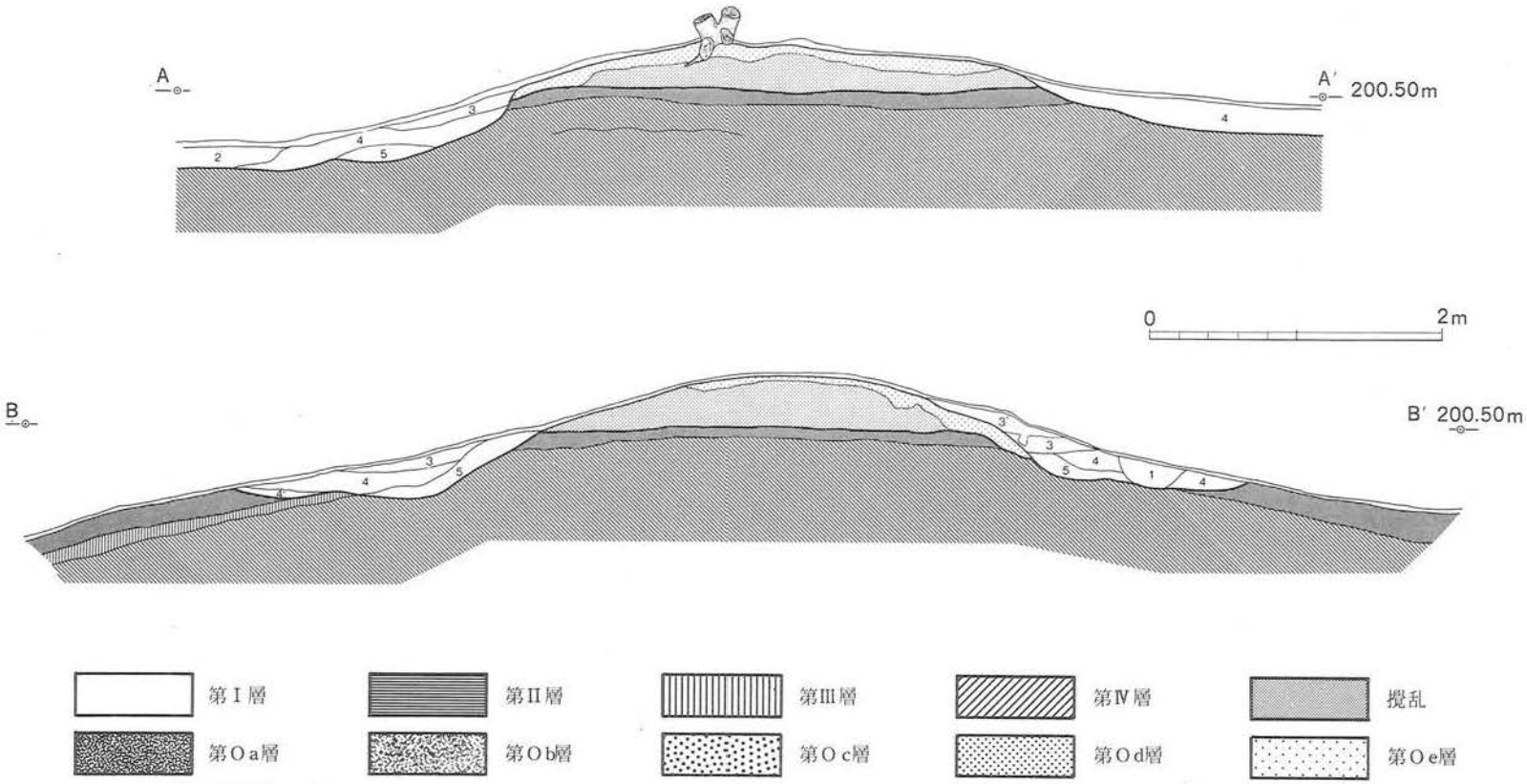
盛　土　塚の封土を構成する盛土の区分は、第12号塚と同じである。確認された盛土層は、

余りバラエティーがなく地山の黄褐色系の土砂を主体としている。塚基底部のプラン設定後、最初に盛土されたのは、第Ｏｄ層であり、第II層の褐色系の土層が混入される度合いが少なく、第IVａ層が大半を占める。次いで盛られたのは、第Ｏｅ層であり、地山第IVｂ層を主体としている。塚最上部を覆うのは、盛土第Ｏｅ層であり、黄色系の強い土で上部を覆うパターンは、第12号塚とは異っている。しかし、塚裾部の覆土最下層（第５層）は暗茶褐色土であり、覆土上部の第４層や第３層が黒褐色系であることから、築造当初に塚頂部が黒色を呈していた可能性は残されている。

基 底 部　基底部上層は、基本層第II層である。基底部の検出は、盛土が少なく地山土主体であったことから掘り過ぎてしまい、第II層上面及び第IV層上面を精査できたのは、セクションベルト部分のみであった。しかし、塚基底部に掘り込まれた遺構はなかったものと判断される。基底部に伴う遺構としては、北辺に検出された浅いピットがある。平面形は楕円形を呈し、長径1.20m、短径0.80m、深度約10cmを測る。



第10図　第13号塚基底部（1:80）



第13号塚覆土土層注

1　褐色土：SKP－14の覆土　　3′　黒褐色土　　4　明黒褐色土

2　褐色土：T－13. pit－1 の覆土　　3　暗茶褐色土　　5　暗茶褐色土

第11図　第13号塚土層断面図（1:50）

4　第14号塚と第15号塚

第14号塚～第16号塚は、発掘調査を実施した２基の塚を含め、協議当初から対象となっていたが、第16号塚は工事予定範囲外となったため、調査対象から除外した。第14号・第15号塚の場合は、協議の結果現状保存となったことから、測量のみ実施した。

第14号塚　第12号・第13号塚は、概ね水平な尾根部に構築されていたが、本塚は南へ緩やかに高くなる傾斜地に構築されていた。塚の平面形は、上部の崩れが著しく明確でないが、下部の等高線からは、方形状を呈することが看取される。規模は、南北の長軸が約6.70m、短軸は約5.70m、高さはおよそ１m程度であり、第12号塚の規模に類似する。塚頂部には直径約10cmの松があったためか、やや尖る。封土は、南西方向を中心として流出が著しい。

第15号塚　本塚も第14号塚と類似したところに構築される。規模もほとんど同じで6.70m×5.70m、高さは約90cmである。平面形は、塚の下部形態から概ね長方形状を呈すると考えられる。本塚頂部の北西側にあった松の年輪数は55年であり、本百塚の築造時期の下限は、少なくとも1940年以前である。(註3)

5　塚関連遺物

今回の調査によって、塚の封土や基底部から出土した遺物は、縄文時代の土器・石器及びガラス製のおはじき１点であった。前者は明らかに塚構築以前であり、これらを除くとおはじき以外無いことになる。

おはじきの年代については、明確なことは分からないが、それほど古くはなく、現代の所産としかいいようがない。

註１　市内最大規模とされているのは、別俣地区の「水上の塚群」であるが、100基前後とされる塚の実数は、伝承の如く未だ不明である。

註２　「イボ山」は、地元では百塚の北側等にある水田等の耕地に対する通称として使用し、百塚が立地する「山」を呼称するものではないようである。しかし、当該地区の耕地がいつ頃開発されたのかは不明だが、炭焼きや山菜採り以外ほとんど活用されないところより、水田等の耕地の比重が高くなることは当然である。本来百塚の立地するところの呼び名であった「イボ山」は、いつしか耕地の通称へと転化したのではないだろうか。このことは、百塚の意味が忘れ去られることと反比例の事象であったかも知れない。

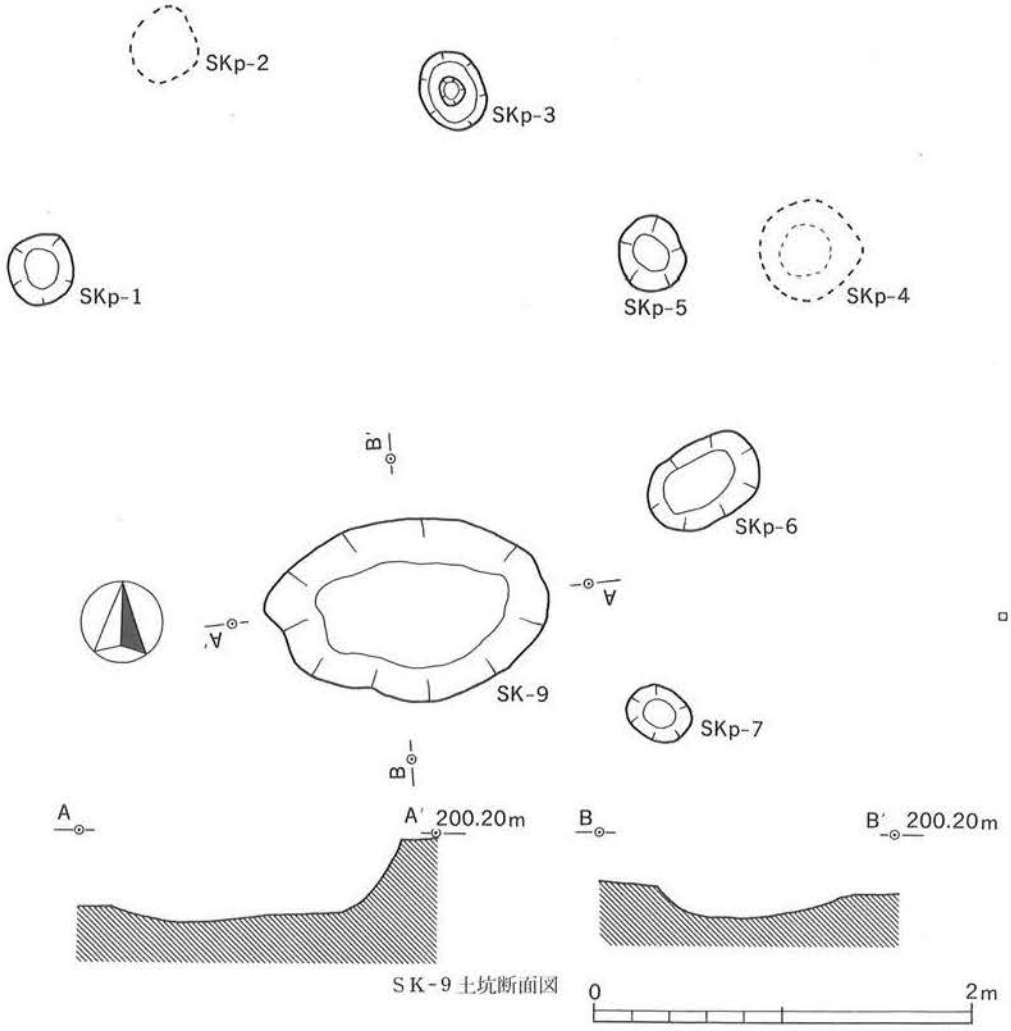
註３　資料的には、1940年以前であるが、塚構築意図等が全く伝っておらないことから、少なくとも18世紀以前と考えられる。

V　百塚以前と以後

1　縄文時代

柏崎市域の塚群は、概して尾根稜線という平坦部の少ないところに立地するが、このようなところでも、縄文時代の遺跡と重複する事例は多い。既調査例では、半田の塚群や向山の塚のように平坦地に立地する塚（群）はもとより、夏渡百塚に類似した立地条件の国光の塚群でも縄文時代の遺物・遺構が確認されている。

遺　　構　縄文時代に属すると考えられる遺構は、8基のピットや土坑である。いずれもD－6グリットから検出されたもので、第12号塚北東部に位置する。ＳＫ－９やＳＫｐ－１は、基底部下の地山に掘り込まれていた。遺物が出土したのは、ＳＫｐ－6(5)とＳＫ－９（1・10）

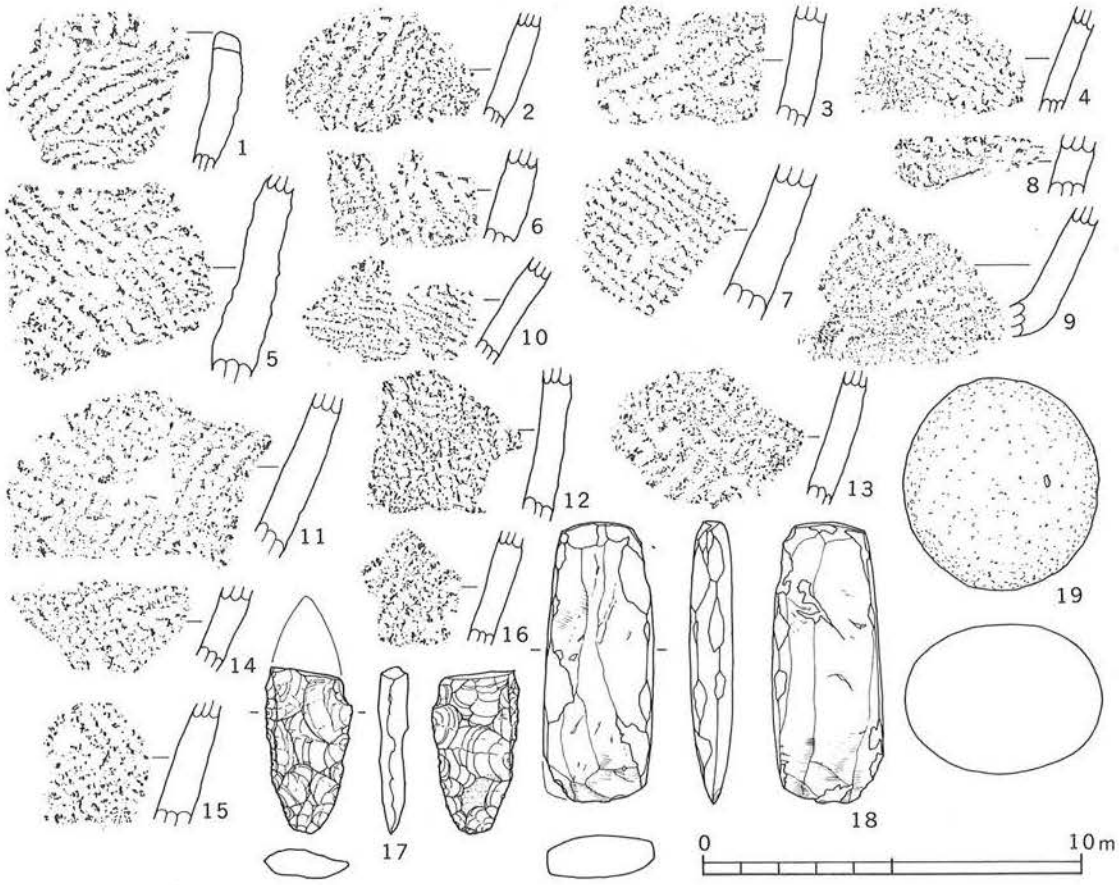


第12図　D－6グリットピット群（1:40）

の２基だけである。ＳＫｐ－６の覆土は、やや赤褐色を呈していたことと、本址を取り巻くようにピットが検出されたことから、住居址の可能性があるものとして調査を進めた。しかし、住居址の壁がなく、ピットが全周しないことなど住居址として確認はできなかった。

遺　物　縄文土器と石器があるが、量的には非常に少なく、土器類約30点、石器類３点であった。縄文土器は、所謂精製土器はなく、ほとんどすべてが縄文を施文したのみの粗製土器で占められている。器形は、深鉢・鉢で占められ、浅鉢等の他の器形は認められない。縄文は、単節の斜縄文が施されたもの（１～９•12•16）と、羽状縄文が施されたもの（10～11•13～15）が存在する。第13図１は、唯一の口縁部破片である。口唇部には、少なくとも７本の鋭い刻みが施されていた。これらは、前期後半期の諸磯式土器に並行すると考えられる。(註1) ただし、７の土器は、他と異なり非常に軽く、繊維が混入している可能性もあるが、確認はできていない。

石器は、石槍・小形磨製石斧・磨石の３点である。石槍（17）は、先端部を欠損したもので、復原された全長は６cmを越えると考えられる。材質は、頁岩である。一部に自然面を残していた。小形磨製石斧（18）は、やや質の悪い蛇紋岩製であり、剝落部が多い。これが使用による



第13図　出土遺物実測図（1:2）※19は1:3

ものかは断定できない。全長7.5cm、幅3.0cmを測る。磨石（19）は、輝石安山岩製である。長径8.4cm、短径7.2cm、厚さは6.1cmであった。

2　中・近世以降

縄文時代の遺構を除くと、時期が明確な遺構はない。百塚も中世以降の築造と考えられるが、時期を確定できず、それと無関係と考えられる他の遺構も同様である。しかし、古代に遡るとは考えにくいため、中・近世以降の遺構として一括して述べたい。

確認された遺構は、焼土遺構や第13号塚周辺のピット群、その他の性格不詳のものがある。

ＳＸ－10焼土遺構　本址は、斜面東側のＥ－６・７グリットに位置し、斜面の垂直方向に対し45度ずれて構築されていた。長軸4.65m、幅1.42m、深度約40cmを測る。当初、構築位置や溝状の平面形態から製炭を意図した登窯状の遺構と考えて調査を進めた。しかし、断面形態が略Ｖ字形を呈し、壁部分の焼土化がほとんど認められず、多量に検出された焼土も遺構内に廃棄されたような状況で確認され、炭化物も小片もしくは粉末化した物のみであることなどから、少なくとも本址が木炭窯である可能性は少ないと考えられる。周辺に、木炭窯等火を用いる施設が存在したことが考えられるが、今回は確認できなかった。

百塚との関係は、地山流出と考えられる覆土上層を薄く覆う土層が、塚構築後の地山面の露呈にともない、雨水等により流出した土砂の可能性があり、塚構築以前に存在していたことが考えられる。しかし、本遺構の性格は確認できず、今後の課題としたい。

遺物は、焼土塊がある程度であるが、何らかの形に整形したと考えられる物が認められる（図版19－２－27～40）。窯壁とも考えられるが、小片のため確認できない。

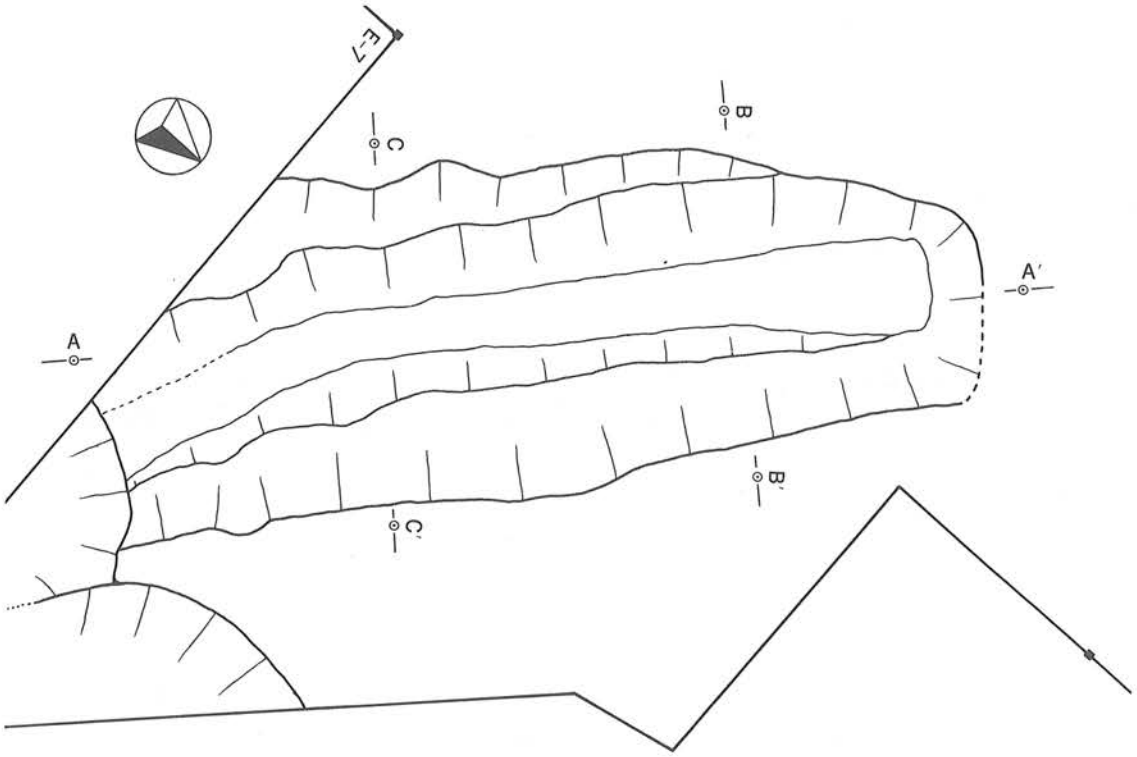
ＳＸ－11ピット群（第５図）　第13号塚の北東に検出された４個のピット群である。各ピットは、直径約20cm、深度は、P_3 が10cm程と浅いが、他は40cm程を測る。本ピット群は、塚の外周を巡るように配置していることから第13号塚に係わる可能性も考慮されたが、塚の土層断面の観察から、本址 P_4 が覆土を切っていることが明かとなり（第10図）、塚構築後かなり隔たって構築された遺構と判断される。第13号塚の盛土を背にし、北西の季節風を避けるかのような位置にあることから、雨風等を避ける仮小屋的な施設があった可能性が考えられる。

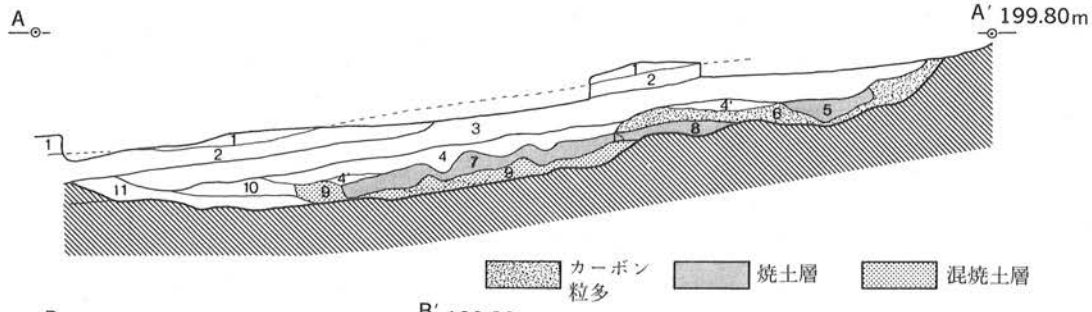
遺物の出土は、一切認められなかった。

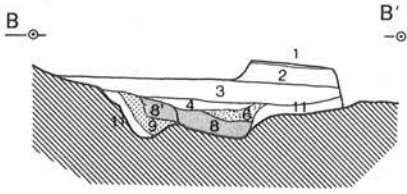
ＳＸ－12落込み（第５図）　百塚前の広場的な場所として、調査した所から検出された。平面形が不整形な溝状の遺構であり、性格等は不明である。遺物は出土していない。

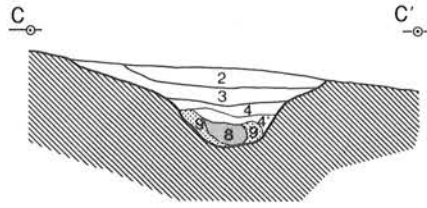
ＳＸ－13落込み（第５図）　調査区東側斜面下方で検出された断切状の遺構である。本址についても、遺物もなく時期を確定できず、性格等も不明とせざるをえないものである。

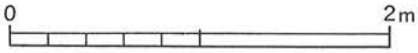
註１　寺崎裕助氏から御教示頂いた。











SX-10 焼土遺構土層注
1 基本層序第Ⅰa層
2 基本層序第Ⅱ層
3 明褐色土
4 明褐色土　第3層より焼土・カーボン粒多く橙色強し
4′ 褐色土　焼土粒，カーボン粒多し
5 焼土塊主体，カーボン粒多し
6 黒褐色土　灰，カーボン粒多し
7 橙褐色土　焼土粒主体
8 赤褐色土　焼土粒主体
9 暗赤褐色土　灰，カーボン粒のブロックを含む
10 褐色土
11 暗黄褐色土

第14図　夏渡の百塚ＳＸ－10焼土遺構（1:40）

Ⅵ 考　　察

1　長鳥川流域における塚(群)について

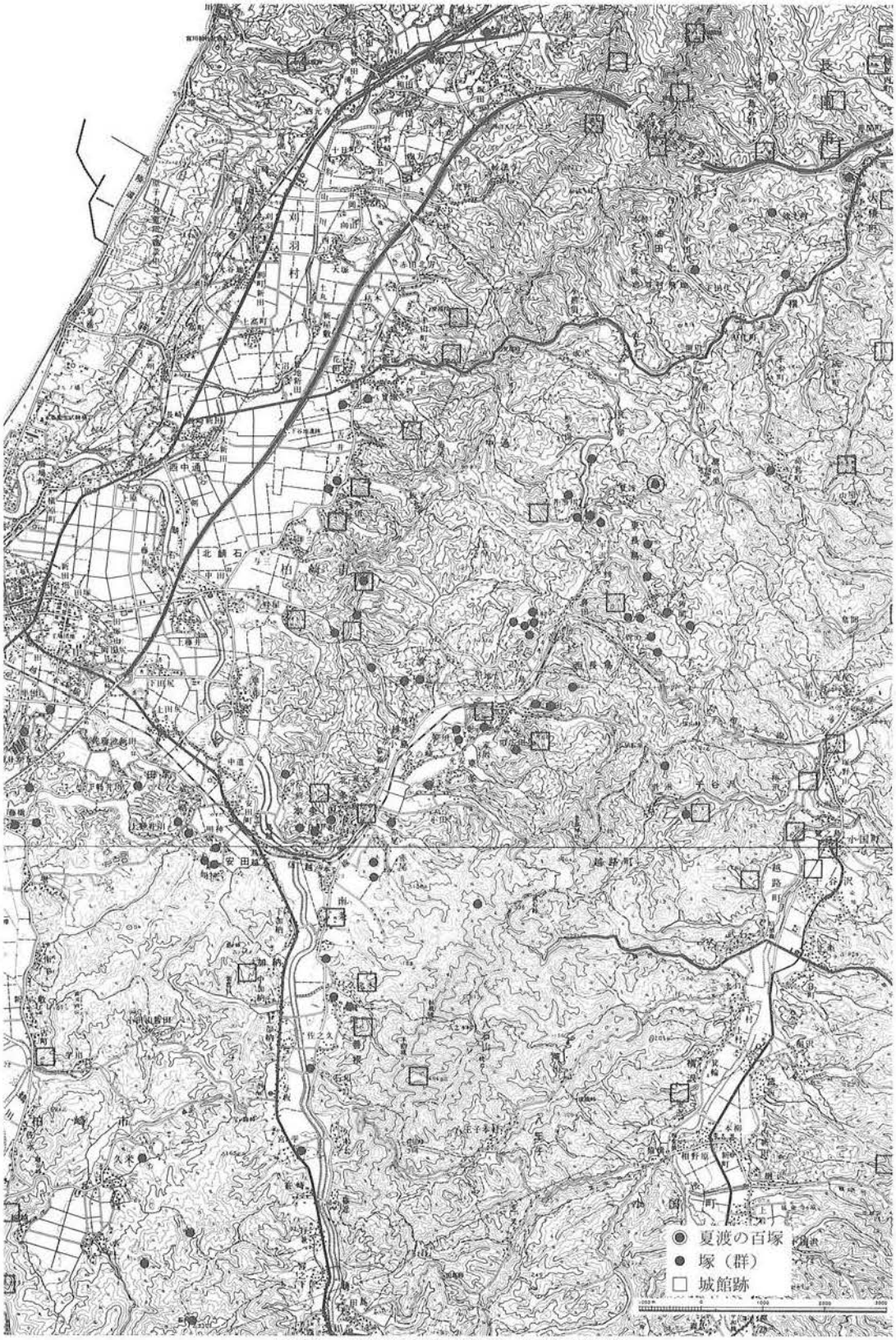
柏崎平野における塚（群）は、その分布からみても県内で最も多く確認されている地域のひとつである。しかし、他地域と同様に詳細は不明のままであり、なぜ本地域に集中的に存在するのか把握されていないのが現状である。発掘調査された塚（群）も、今回の百塚を含め5例目となるが、遺物が確認されある程度検証可能な例は、極めて少ない。本市域における唯一の事例が、半田の塚群第3号塚（中村　1985）である。しかし、この1例をもって塚全般を考察するには無理を伴う。塚を理解していくためには、個々の塚を検討することも大切であろうが、一地域に分布する塚群について、その立地や塚群の構成及び分布等の基礎的な状況を把握していくことも、現在必要な方法と言えるのではないだろうか。本市域の塚群については、以前概観したことがあるため（品田　1986•1988)、本節では柏崎平野東部に位置する長鳥川流域を中心として、その立地や分布及び塚の群構成等を中心にまとめることとしたい。

塚の分布と立地　長鳥川流域一帯（旧刈羽郡北条町）は、柏崎市域における塚（群）分布の中心地域で、市域全体の約6割（約300基）が確認されている。この成果は、緻密な分布調査の結果であり、塚分布の現状を把握するのには最も適した地域である。しかし、この数字が普通なのか特殊なのかはもう少し検討が必要であろう。塚は、考古学上の市民権を得てから日も浅く、まだ完全にその位置付けがなされているとは言い切れないのが現状であり、塚の分布調査が充分とは考えられないからである。

第15図は、現在確認されている塚（群）を、各々1個のドットとした分布を示している。分布の傾向としては、長鳥川本流や支流域に沿っていることが読み取れるが、それ以外では特に顕著な特徴は認められない。もっとも、たとえ表面的に認められたとしても、時代やその目的が異なる塚を一律に評価することは無意味であるため、それ以上は差し控えなければならないことかも知れない。

しかし、立地面と考え合わせると、塚の一般的傾向を知ることができる。塚が構築された位置は、集落に近い所謂里山とでも言えるところに分布する状況が窺え、山中の道もなく、集落や耕地から遠いところでは空白的様相を呈している[註1]。塚が、集落近くに多く構築されるということは、人と塚が密接な関係にあったことを示唆している。塚は、特殊な場合を除くとほとんど記録に残されないが、これは逆に塚を築く行為がかなり一般的であったことを裏付けているのではないだろうか。塚（群）は、よく古道や旧道に沿って築かれることが多く、塚自体は、ひと目を忍ぶものではなく、常に人々が意識する必要があったことを意味しているといえよう。

塚の群構成　柏崎平野において塚（群）が立地する地形は、そのほとんどが尾根や丘陵の稜線に構築され、沖積地等の低地部では確認されていない。長鳥川流域においては、沖積地では、全く確認されておらず、すべて尾根等に立地している。



第15図　柏崎平野東部の塚(群)と城館跡分布図

現在確認されている塚（群）は、分水嶺となる丘陵稜線や長鳥地区に含まれる黒川上流部を含めると合計37ヶ所、塚群を構成する員数では、単独8、2～3基11、5～9基5、10～20基11、28基1、64基1となる。

単独で構成される塚と複数で群を構成する塚群とでは、その意味が異なり、また単独の塚でも更に意味が異なっていたと考えられる。単独例の名称をみると、「じょうきん塚」や「行塚」といった固有な名称をもったり、峠に構築された例が多い。また、高田地区藤橋の向山の塚と同じく、字向山に所在する場合も単独という事例が存在している。

これに対し、複数で構成される塚群は、百塚の名で呼称される場合を除くと、現在までその名称が残存することが少なく、小字名によってその呼称に代えているのが現状である。これらの中で2～3基の数基で構成される塚群は、三ツ塚あるいは双子塚などと称されることがあるが、本地域においては認められない。百塚は、一般的には禁忌的な伝承が残されるのみで、夏渡の百塚も同様であった。

塚群の群構成は、列状と不規則に配列するものとに大別できる。ただし、細かくみると一群中において、直列する部分と不規則になる部分があったり、全体としては列状であるがやや不揃いの場合などがあり、一概に律し切れない事例も存在する。しかし、一般的には、尾根あるいは丘陵の稜線に沿って列状に構築され、数百mにも及ぶ場合は別として直列を意識したと考えられる塚群が多い。本地域においては、5基以上の塚群18例の内、列状をなさないのは蛇越塚群の1例のみであり、(註2) やや不規則な状況を呈する2例を含めても3例でしかない。この実態が、一般的であるかについては、他地域の状況が摑めない現状では慎重にならざるを得ないが、少なくとも柏崎平野を中心とした地域での特徴であることは確かといえるであろう。

番号	名　　称	所在地	員数
1	今熊の百塚	今熊	17
2	大山の塚群	小島	10
3	オカラシバの塚群	西長鳥	8
4	ヤケヤの塚群	西長鳥	3
5	夏渡の百塚	東長鳥	64
6	大角間の百塚	東長鳥	28
7	ソデ山の塚群	東長鳥	5
8	蛇越塚群	東長鳥	10
9	八方口の塚群	畔屋	16
10	大山の塚群	山澗	12
11	宮ノ下の塚群	山澗	14
12	塚穴塚	東長鳥	3
13	アネンボ塚	西長鳥	1
14	七面塚	北条	5
15	じょうきん塚	本条	1
16	国光の塚群	北条	11
17	梨ノ木峠の塚	東長鳥	1
18	峠の塚	東長鳥	1
19	関ノ平の塚	東長鳥	2
20	屋敷の塚	東長鳥	1
21	袖ノ久保塚	西長鳥	2
22	背中峠の塚	西長鳥	1
23	老ノ浦の塚	西長鳥	2
24	滝ノ入の塚	西長鳥	5
25	向山の塚	西長鳥	1
26	行塚	西長鳥	1
27	広田の塚群B	大広田	12
28	広田の塚群A	大広田	15
29	金山の塚	東条	3
30	三輪の塚	東条	2
31	庚塚	小島	3
32	イボ山の塚	小島	11
33	大場山の塚群	北条	3
34	愛宕山の塚群	北条	19
35	宮ノ入の塚群	北条	3
36	小坂の塚群	本条	2
37	神塚の塚群	吉井黒川	5

第3表　長鳥川流域の塚(群)地名表

2　夏渡の百塚について

夏渡の百塚は、歴史的に形成された環境や、立地及びその景観から見ても、他の塚群とは異なった意義が感じられる塚群である。しかし、記録や伝承、更には遺物もなく、これらの意義を確認する根拠を持ち合わせていないことも事実である。塚は、ほとんど遺物等を伴わないことが一般的であり、これからすれば一般的塚群とすることができるのかも知れないが、以下に塚群の構成や、今回調査された第12号、第13号塚の成果とともに分析し考察を試みたい。

1)　百塚の群構成

夏渡の百塚64基の塚に対して、その群構成を便宜的に分類し区分すると、第１号塚～第54号塚までの計54基をＡ群、第55号塚～第61号塚の７基をＢ群、そして第62号塚～第64号塚の３基をＣ群として、３群に大別が可能である。

Ａ　　群　Ａ群は、従来夏渡の百塚として周知されてきた塚群であり、51基の塚が確認されていたが、今回あらためて再調査した結果54基となった。本群の中心をなすものは、第24号塚で百塚の要ともいえる一辺約10mの方形塚である。

Ａ群の構成は、この第24号塚を中心に南へ伸びる第１号塚～第11号塚の11基（Ａ－Ⅰ群）、北側の第12号塚～第23号塚までの12基（Ａ－Ⅱ群）、東への第24号塚～第54号塚までの31基（Ａ－Ⅲ群）の３小群に細分することができる。

Ａ－Ⅰ群は、第１号塚を除くと、第６号塚と第７号塚との間が、他より間隔がやや広いものの概ね等間隔に構築されている。塚の規模は、一辺約６～７ｍ、高さは１ｍ前後を呈するが、第１号塚は、一辺約１ｍとかなり小さく、高さも20～30cm程度であるため塚かどうかは不明といえよう。本群は、全体としては他群と比して風化の度合いが著しく、形状及び平面形もかなり丸みを帯びている。これは他群より築造が早いことも考えられるが、封土の盛り方という原因も考えられ不明である。なお本群西側には、現在では廃道同然の山道が塚群に沿って通っている。

Ａ－Ⅱ群は、分水嶺の尾根主軸から北に派生する支尾根上に構築される。第23号塚の南側、第24号塚との間は、Ａ－Ⅰ群沿いに登る古道が通り、深さ1.5m程の切り通しとなる。第23号塚南の道沿いには、高さ50cm程の地膨れが認められるが、これは古道の切り通し掘削時の排土と考えられる。塚は、10m程の等間隔に概ね直列に並ぶ。塚の規模は、一辺約５～６ｍ、高さ約70～80cm前後である。本支群は、全体的にやや荒れた感じを受ける。平面形も方形というより、長方形のものが多い。これは発掘調査を実施した第12号・第13号塚に端的に表れている。また、第23号塚の封土上には、長径30cm程の楕円形の川原石が地上に露呈していた。これには、銘文等は認められず、石碑等の可能性は少ない。ただ、川原石出土地点が古道の尾根を切り通す地点であり、後述する旧道切り通し部に安置された石仏と考え合わせると、この石仏に関係していることも考えられる。

Ａ－Ⅲ群は、分水嶺主軸の稜線に沿って200m余りにもわたって延々と塚が構築されている。

これらは、すべて地形的制約を受けて構築されるが、第37号塚と第38号塚との中間で尾根の稜線にずれがあり、このためか他より間隔を開けている。各塚間の間隔は、第24号～第37号塚間が概ね10m前後で構築されているのに対し、第38号～第48号塚間は、５～６ｍ程の間隔しかなく、特に第46号～第48号塚間は、３基が連続的に構築されている。第49号～第54号塚間は、その間隔が10m以上を測る。

本支群は、各塚の間隔から見れば更に細分する必要が考えられる。第24号・第25号・第35号の各塚を除き、第26号～第37号塚の11基をａ群、第38号～第48号塚の11基をｂ群、第49号～第54号塚の６基をｃ群としておきたい。ａ・ｂ・ｃ各群から除いた塚のうち、第24号塚は、百塚の所謂親塚であるが、第25号、第35号塚の２基は直列という本百塚のルールから外れており、この意味は不明である。また同様にＡ群に含めなかった第55号、第56号塚についても本群の枝塚と理解することが妥当なのかも知れない。

なお、ｂ群の北東沿いに接して道状の痕跡が残り、ｃ群の第49号塚と第50号塚の間は、夏渡から鷹ノ巣へ通じる旧道が通る。後者の旧道は、幅４～５ｍ、深度約３ｍの切り通しとなっている。この古道掘削のためか、第50号塚は全体の２割程度しか残存していない。また、第49号塚と第55号塚に挟まれた道の旁には数体の石仏が安置されて、昔日の面影を今に残していた。

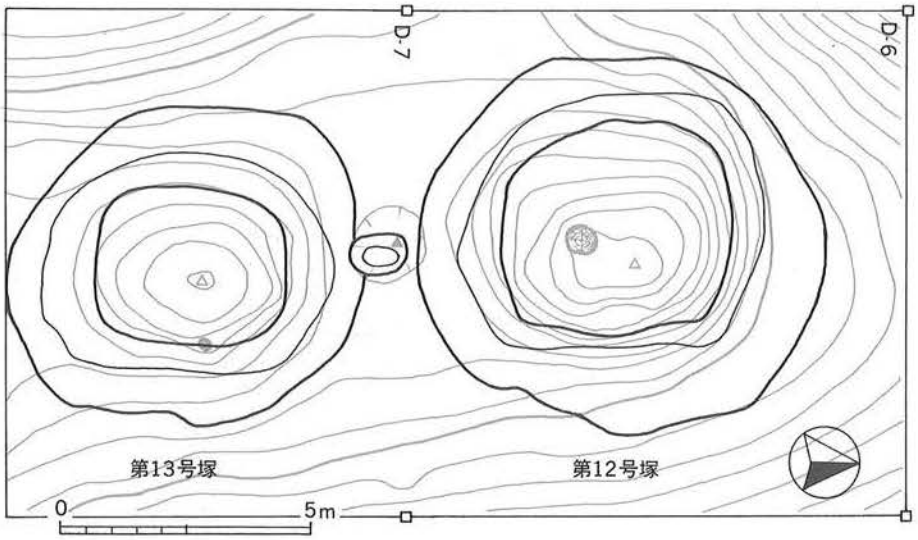
Ｂ　群　本群は、今回新たに確認されたものである。Ａ－Ⅲｂ群の北東側、直径30m程の独立丘上を中心に構築された７基の塚群で、上述のように第56号・第59号塚を除くと、第59号塚の親塚を中心としたひとつの独立した塚群となる。親塚と考えられる第59号塚は一辺約10m、他は約６～７ｍ前後である。本地点は、尾根の稜線が明瞭でないためか、各塚の配列も直列ではない。ただし、Ａ－Ⅲ群と概ね平行した配列といえよう。

Ｃ　群　本群もＢ群と同じく新たに確認された塚群である。Ａ－Ⅲｃ群の東30mに位置する。本群は、長さ70m、幅20m程の独立丘の尾根線斜面に３基が構築されていたものであるが、独立丘頂部の平坦地には何も確認されなかった。３基は概ね10m程で直列する。規模は、一辺約５～６ｍ程であった。本群は、Ａ群、Ｂ群という百塚本体から離れて位置することから、本来独立した塚群の可能性がある。

2）第12号・第13号塚の検討

今回調査した２基の塚は、百塚Ａ－Ⅲｂ群の北端にあって、信濃川水系の一支流黒川の流域平野に向かってのびる尾根上に位置する。夏渡の百塚に関する手懸かりは、禁忌的伝承が僅かに残るのみで、この伝承自体も百塚に普通に伴う一般的なものでしかない。今回発掘した２基の塚は、結果的に遺物が出土せず、百塚に対して積極的に論じることはできないが、この特異な塚群を考察する上で唯一の手懸かりといえる。本項では、調査の結果について、築造工程を中心にまとめ、百塚理解への一歩としたい。

基底部と封土との関係　２基の塚について、封土と基底部との関係を示したのが、第16図である。両者の関係をみると、封土の頂部は基底部中央から北東側にずれており、封土の断面も北東側が急で、南西方向に緩やかとなっていることが読み取れる。夏渡の百塚Ａ－Ⅱ群に含ま



第16図　第12号・第13号塚の基底部と盛土

れる塚のほとんどが同じ傾向を呈している。同様なことは向山の塚においても窺うことができ、その方向から季節風等による降雨に吹き付けられた結果である可能性が強い。その段階は、構築後間もなくの草木のほとんどない時に流出したのではないだろうか。塚封土の崩れは、南西側を除くとそれほど大きくなく、ある程度原形を留めていた。

また、第13号塚北辺で、第12号塚との境から検出された浅いピットは、現表土上面でも浅い窪みを観察することができる。両塚の中間を何らかの目的のため、後世に攪乱した可能性も考えられるが、向山の塚や国光の塚群第10号塚のように類例があることから、本例も塚に伴うものと考えたい。その場合、斜面の方向から第13号塚に伴っていた可能性が強いと言え、第12号塚では検出されていない。この浅いピットの意図は不明である。

築造工程　塚の築造方法は、第１段階として築造地点における樹木等の除去が考えられる。塚自体の築造は、大地へのプラン設定であるが、塚のプラン内は特にきれいにされた可能性がある。第２段階は、プラン外縁の掘削と基底部の削出である。その時の掘削土は、基底部上面を覆う盛土となるが、第13号塚のように、基底部の削出だけである程度塚本体が出来上がり、盛土と言う作業の軽減が計られている。第12号塚においては、地山層をやや主体とした第Ｏｃ層が盛られ、第13号塚では地山層主体の第Ｏｄ層となっている。第３段階は、周辺から土砂を削土しながら塚本体を構築し、第４段階として整形や仕上げということになる。

築造順序　第12号塚と第13号塚とを比して大きく異なるのが、封土である。第12号塚は、概して黒色（表土）系の土砂が多いのに対し、第13号塚は地山系の黄褐色土を主体としていた。塚本体の封土について、密教の考えを導入して、黄色と黒色との盛り分けがあったとする見解があるが(金子　1974)、夏渡の百塚の場合は偶然による結果と判断される。その偶然とは、築造の順序を示していると考えられる。

第12号塚に黒色系の盛土が多いのは、塚近辺の表土を中心に封土とした為であり、第13号塚の場合は、第12号塚築造終了後、塚近辺の地山が露出したところから盛土用の土砂を採集した為と考えられるのである。

しかし、第13号塚の基底部には、第II層とした旧表土層が存在することから、第12号塚築造段階にはすでに、第13号塚のプランも設定されていたことが明確である。第12号と第13号塚は、ほぼ時を同じくして構築されたが、その場合最初に第12号塚が構築されたと判断されるのである。同様な事例は、国光の塚群第9号塚～第11号塚でも確認されている（品田　1983)。

3)　夏渡の百塚の検討　――まとめにかえて――

百塚構築の意図　夏渡の百塚について、他の塚群とは何か違う塚群であると考えさせられるのは、規模や分布形態及びその立地のせいではないだろうか。百塚は、向斜軸に規則正しく沿う八石、曽地の両丘陵に挟まれ、かつ長鳥川と黒川の両流域の分水嶺上に位置していた。その眺望は、長鳥川流域を見通し、北方は遠く信濃川流域まで臨むことができる。これは、逆に言えば集落等が立地する河川流域からも、その存在を認めることができることを意味している。そこで問題となるのが、百塚の存在が主体的に意義をもつ地域がどこになるかである。黒川流域から百塚をみた景観は、幾重にも重なる丘陵の一部でしかないのに対し、長鳥川流域からは百塚の位置を容易に認めることができる。また、現在長鳥地区に包括されているという事実から、夏渡の百塚築造に至る要因は、長鳥川流域の諸地域にあったとするほうに妥当性があると考えられる。

長鳥川流域で確認されている塚群の多くは、尾根等でも比較的高台に位置し、それなりに眺望は利く。しかし、全体からみれば局地的であって、近在の集落等と直接関係するものといえよう。夏渡の百塚の場合は、夏渡や鷹ノ巣といった長鳥地区の小集落のみと密接に関係するというよりも、少なくとも長鳥川流域という広域的な地域に対するものではないだろうか。これを裏付けるような痕跡は、伝承にもなく、また広域的な信仰についても後付けはできず、全くの臆測に過ぎない。しかし、夏渡の百塚が立地する地点は、一つの聖地的感覚を備えた「場」として、信仰の対象となっていた可能性を強く感じるのである。

このような前提が正しいとすれば、夏渡の百塚構築の意図とは如何なることとなるであろうか。それは、百塚の立地する地点がより問題になると考えられる。

柏崎・刈羽地域は、合併等による一部の地域を除くと、古代にあっては古志郡に含まれ、9世紀頃に三嶋郡として分置・独立したとされている。この事由については明確でないが、信濃川流域と水系を異にした、柏崎（刈羽）平野という地理的環境によることも、大きな要因と考えられる。現在の行政区画においても、また近世の村境とほぼ重なる大字界についても、地理的にその領域が設定される場合が多い。

夏渡の百塚が所在する長鳥地区の場合は、夏渡の集落が長鳥川の上流域にあって、鯖石川水系に属するが、鷹ノ巣は、黒川の流域で信濃川水系に属することになり、両集落の間に分水嶺が位置することになる。隣接する大角間では、同一の村域で黒川と長鳥川の両水系にまたがっ

ている。また、長鳥地区の北西に位置する大字中通（地区）の場合も、集落の主体は鯖石川の支流別山川流域にありながら、村域自体は黒川流域にまで伸びている。これらのことは、柏崎平野東部の丘陵地域においては、現集落の領域が確定する近世に至るまで、分水嶺をもって村域や郡域といった境界とするまでに至っていなかったことを示唆している。しかし、これをもって両集落がともに長鳥地区内にあることから、両水系の分水嶺で三嶋郡境とはなっていなかったとは言い切れず、境界認識が明確になる以前では夏渡あるいは鷹ノ巣辺りが、漠然とした中で境界として意識されていたのではないだろうか。古代における漠然とした境界認識は、中世に至って山野の開発が進むとともに明確化し、近世において境界線として確定したと考えられる。近世以降の境界設定は、地形的に区分されることも多かったであろうが、なだらかな丘陵地域ではそれが明確でなく、山野の開発者が優先的に占有し、その力関係等から境界が設定されたと考えられる。

現在、夏渡の百塚が立地する地点は、市町村と言う行政区画でも、大字界でもなく、長鳥地区内の小集落の境でもない。しかしこの境界は近世のおそらく後期に至って確定したものと考えられ、それ以前の漠然とした段階では、百塚の立地する小山が境界の象徴として認識されていただけであったのではないだろうか。多数の塚が群をなしているのは、象徴としての境界をより具象的に示す必要があって、それを意図して百塚が構築されたことが考えられるのである。

山野の開発と塚の意義　普通一般的に言われる「塚」は、何時頃から造られるようになったのであろうか。経塚や明らかに墳墓と考えられるものを除くと、築造時期が明確な塚は少なく、その初現は不明としか言い様がない。しかし、今のところ根拠は希薄であるが、概ね中世も後期に至ってからではないかと考えられる。塚は、集落から離れた尾根等の山野、道筋や峠、あるいは村境や耕地の境界とも言える河岸段丘の崖線等に沿って主に築かれ、居住空間としての集落内に築かれることはほとんど認められない。この現象は、集落や耕地を強く意識した結果であり、地縁的結合を抜きにしては考えられないのではないだろうか。地縁的集団による集落が顕著となるのは、主に中世後期に至ってからであり、塚の意味もこれと無関係ではないと考えられる。この想定が正しいとすれば、所謂「塚」が構築されるのは地縁的集落が顕著となった段階以降であり、境塚的塚（群）が多くなるのも当然の結果と言えるのかも知れない。

また、塚の構築により境界を明示する必要が生じるのは、漠然とした境界としての山野が、その開発が進むとともに、経済的な重要性を帯びることと比例しているのではないだろうか。当地方において、山野の開発が活発化するのは、長鳥川流域を支配した北条氏と無関係ではないであろう。また、それと共に地縁的集落が形成され、村落個々による開発も顕著になっていったと考えられる。また、山野の開発がもっと著しいのは近世であり、18世紀頃築造の塚が存在するのも、やはり山野の開発と境界認識の明確化という必要性があったのではないだろうか。

以上の想定は、資料的根拠に乏しく、状況的なことからの予測に過ぎない。また、資料的制約からこれらを確認していくことには、かなり困難を伴うことと考えられる。しかし、従来の塚研究は、城館との関係とか、密教や修験者等の宗教的観点に重きが置かれ、一般集落との関

係や山野の開発と言った視点は、どちらかと言えばなおざりにされてきた感がある。今回の夏渡の百塚に対する理解を、一方的に集落や村人あるいは山野の開発との関係のみで論ずることはできないであろうが、一つの解釈として敢えて試みてみたものである。塚を考察できる史料や遺物あるいは伝承は、きわめて乏しく簡単にその正体を明かしてはくれない。この現状も解釈する時の手懸かりの一つではあるが、余りにも消極的に過ぎ、塚解明にあってはいろいろな角度から考察が必要である。塚研究の課題の中には、このような視点を多く持つという必要性もあるのではないだろうか。

3　おわりに

新潟県における塚群には、百塚と称される規模の大きな塚群が多く、全国的にも分布が知られる所である。今回は、これら百塚について詳細に触れることができなかったため、百塚と呼称される塚群について若干触れておわりとしたい。

柏崎市域においても、夏渡の百塚以外に吉井や今熊あるいは大角間などに小規模ながら百塚があり、市内最大とされる水上の塚群も地元では百塚と呼称されているなど、小規模なものまで洗い出せばかなりの数に昇ると考えられる。全県的にみて著名なのは、三島郡越路町朝日百塚（148基）、小千谷市三佛生の百塚（159基）、南魚沼郡六日町寺浦百塚（19基以上）・寺ヶ鼻百塚（128基）、十日町市川治百塚等が掲げられ、かなり規模の大きな百塚が存在することになる。夏渡の百塚は、これらからみれば中規模程度といえよう。

ある塚群を、他と区別するかのように「百塚」と呼称するには、それなりの意味があり、互いに何らかの共通性があったと考えられる。しかし、現象面に現れた結果はどうであろうか。

地形的な立地環境では、尾根筋や河岸段丘があり、後者例では三佛生の百塚が顕著な事例であろう。塚の配列では、直列状を呈する例が多いが、そうでないものがあり、後者では川治百塚や寺浦百塚がある。夏渡例と類似して三叉状に配列する例としては、埼玉県物見山塚群があるが、山頂は山城であり、塚群は裾野の尾根線上に構築されている。百塚構成員数においてもかなりの開きがあって、共通項が見出しにくいのが現状である。

このように百塚と一括される「百塚」とは、その表現自体は地域的差異があって、「十三塚」のような配列重視の塚群ではなかったと考えられる。百塚においては、塚を築くその「場」が重要であったのではないだろうか。河原的な河岸段丘の崖線沿いや分水嶺あるいは尾根筋等の境界的な場所に、多くの塚を築かなければならない事由が考えられるのである。百塚以外の塚（群）との関係もあるが、塚構築の背景として境界の認識が存在したのではないだろうか。これらの観点から「塚」を見直すためには、資料等がほとんどなく、証明することが困難であるが、各地の塚（群）の事例を比較・検討しながら再検討して行きたいと思う。今後の御指導・御叱責及び御教授を乞う次第である。

註1　鵜川西岸の米山山塊には塚の分布はほとんど認められない。
註2　半田の塚群も不規則例であった（中村　1985）。

〈引　用・参　考　文　献〉

柏崎市教育委員会　1983『国光の塚群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第３）

柏崎市教育委員会　1986『向山の塚』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第６）

柏崎市史編さん委員会　1987ａ『柏崎市史資料集　考古編１』

柏崎市史編さん委員会　1987ｂ『柏崎市史資料集　古代・中世編』

金子　達　1975「解題（毛利安田文書）」『影印北越中世文書』柏書房

金子　達　1976「刈羽郡の荘・保」『かみくひむし』第21号　かみくひむしの会

金子拓男　1974「川治百塚と第６号塚の性格」『北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書（川治百塚第６号塚）』（埋蔵文化財緊急調査報告書第２）新潟県教育委員会

木村宗文　1986「第５章　律令制下の越後・佐渡　第５節　交通と運輸」『新潟県史』通史編１原始・古代　新潟県

品田高志　1983「国光の塚群について」『国光の塚群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第３）柏崎市教育委員会

品田高志　1986「柏崎市域の塚（群）について」『向山の塚』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第６）柏崎市教育委員会

品田高志　1988「柏崎市域の塚伝承について」『柏崎の民俗』創刊号　柏崎民俗の会

品田高志　1988「柏崎市夏渡・谷地遺跡の縄文土器」『新潟考古学談話会会報』第２号

田中圭一　1988「越後佐渡の天領民の生活と思想」第４回全国天領ゼミナールレジュメ（発表）　出雲崎町

新潟県教育委員会　1980『昭和54年度新潟県遺跡地図』

中村孝三郎　1985「半田赤坂山墳塚群」柏崎市教育委員会

丹羽邦男　1987「近世における山野河海の所有・支配と明治の変革」『日本の社会史』第２巻　岩波書店

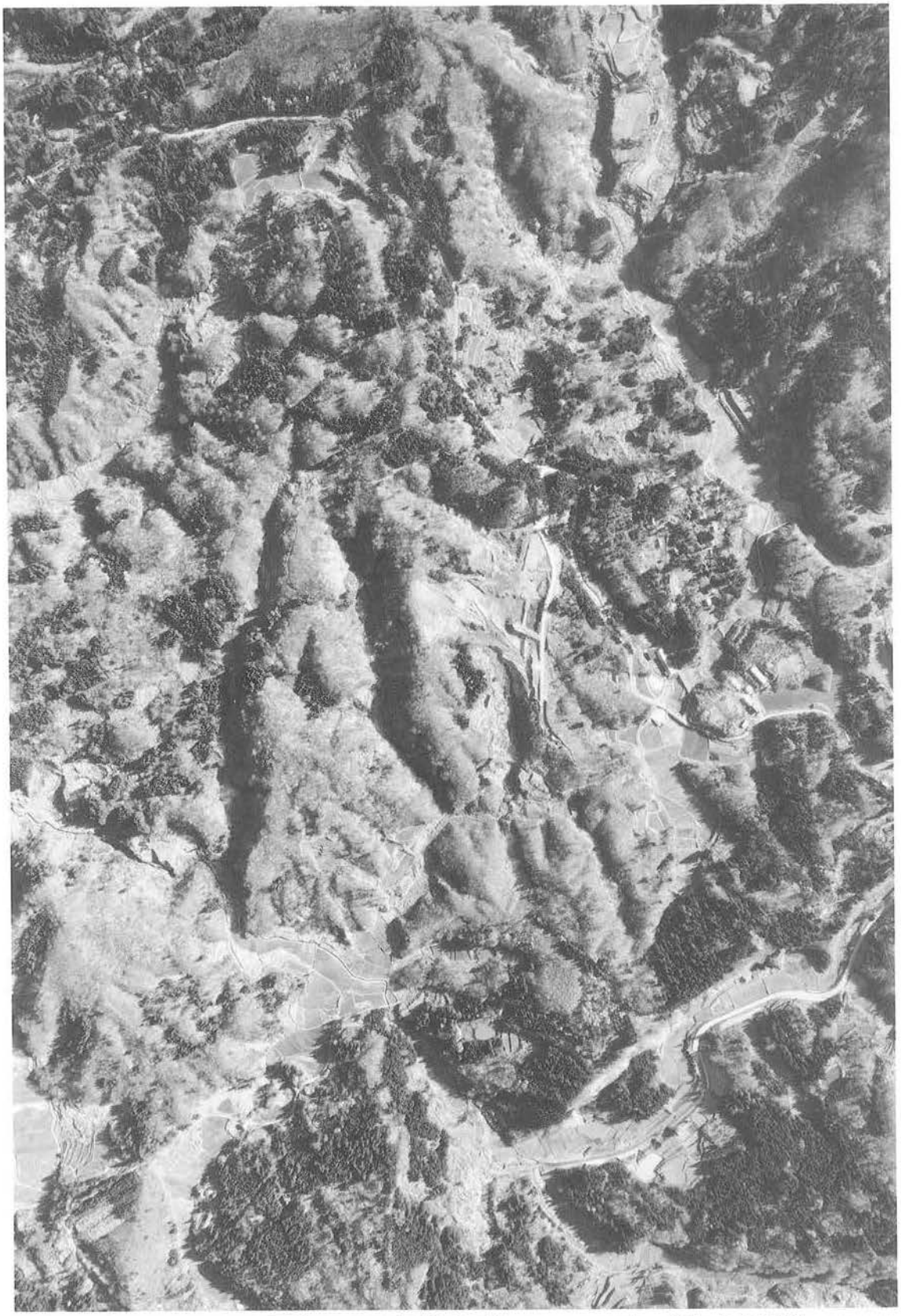
藤木　久　1987「境界の裁定者」『日本の社会史』第２巻　岩波書店

保立道久　1987「中世における山野河海の領有と支配」『日本の社会史』第２巻　岩波書店

山本　肇・宇佐美篤美　1987ａ「引地Ｂ遺跡」『柏崎市史資料集　考古編１』柏崎市史編さん委員会

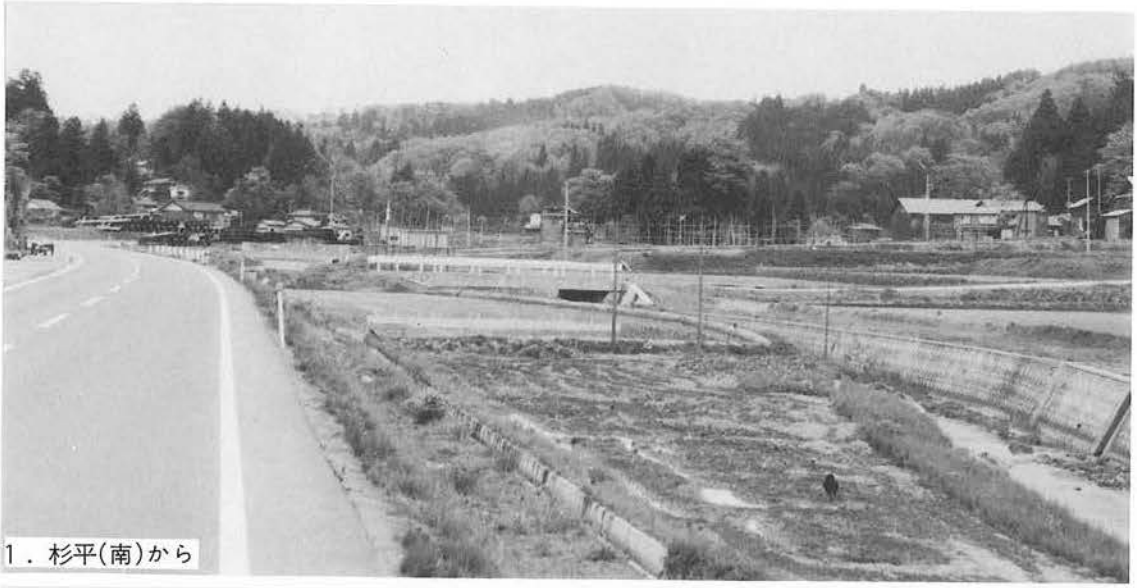
山本　肇・宇佐美篤美　1987ｂ「引地Ａ遺跡」『柏崎市史資料集　考古編１』柏崎市史編さん委員会

米沢　康　1980「大宝２年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第32巻第６号　信濃史学会



夏渡の百塚周辺航空写真 （1：10,000） ㈱東京電力提供 1984.12

図 版 2



1．杉平(南)から

2．峠(南西)から

3．吉井黒川・神塚(西)から

夏渡の百塚遠景

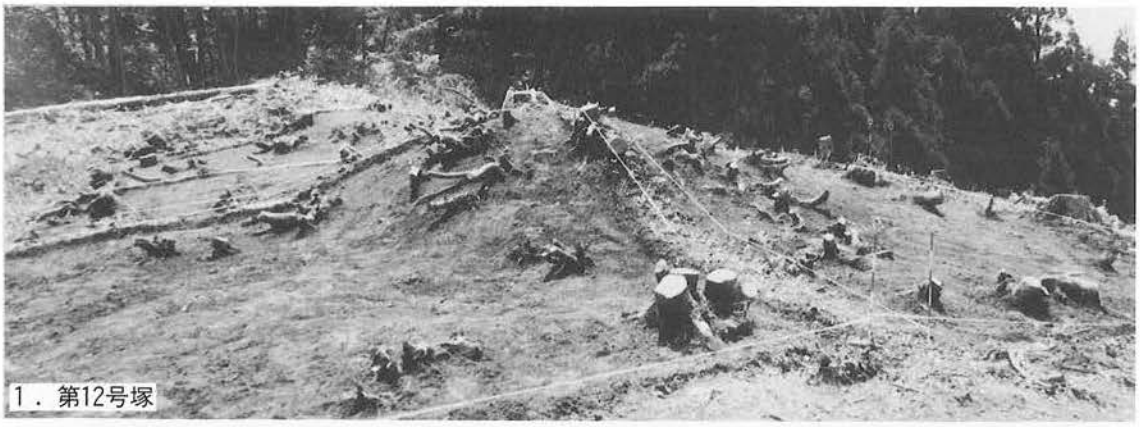
1．東から

2．北西から

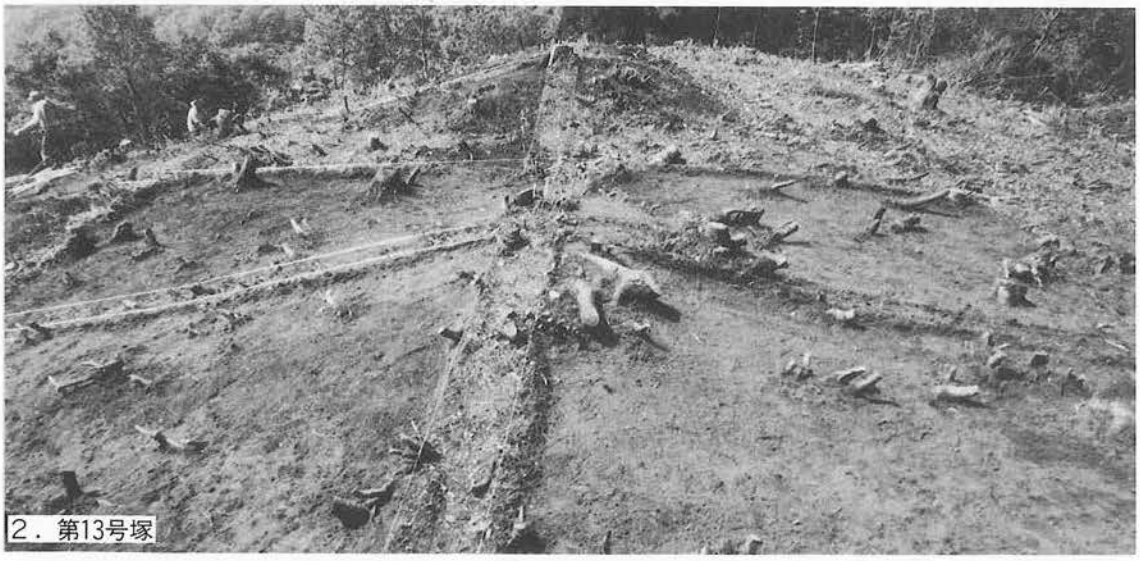
3．南から

百塚の調査前

図 版 4



1．第12号塚

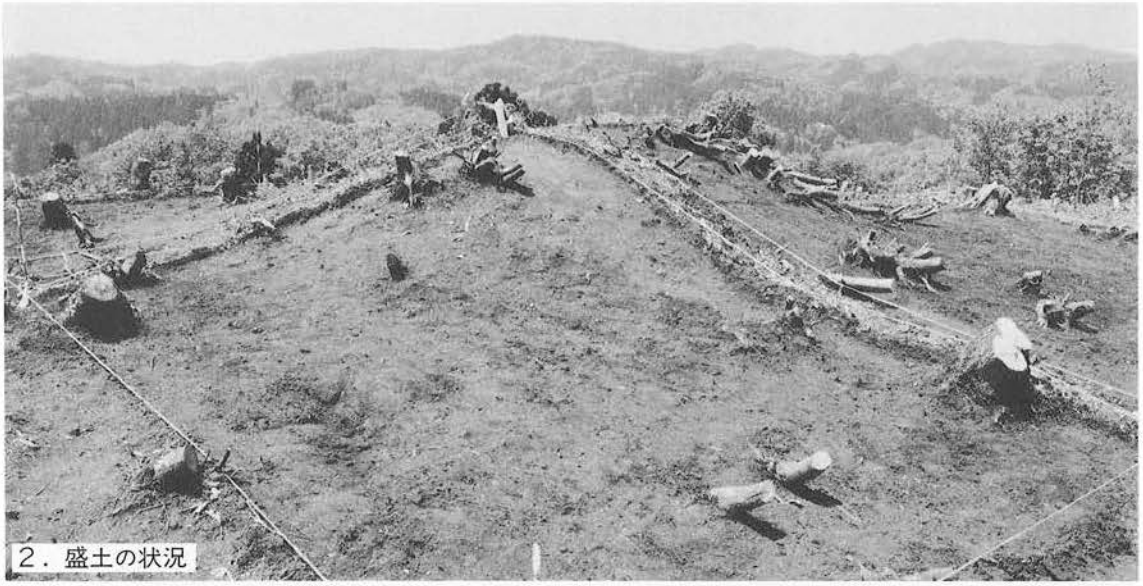


2．第13号塚

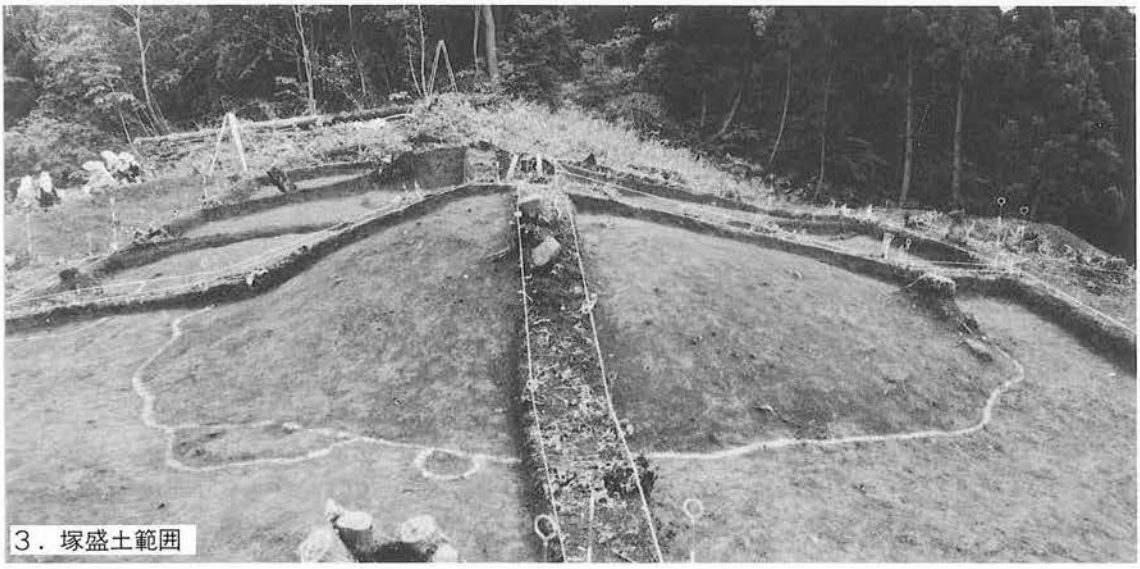
3．第12号・第13号塚

表土剝ぎ

1．発掘前



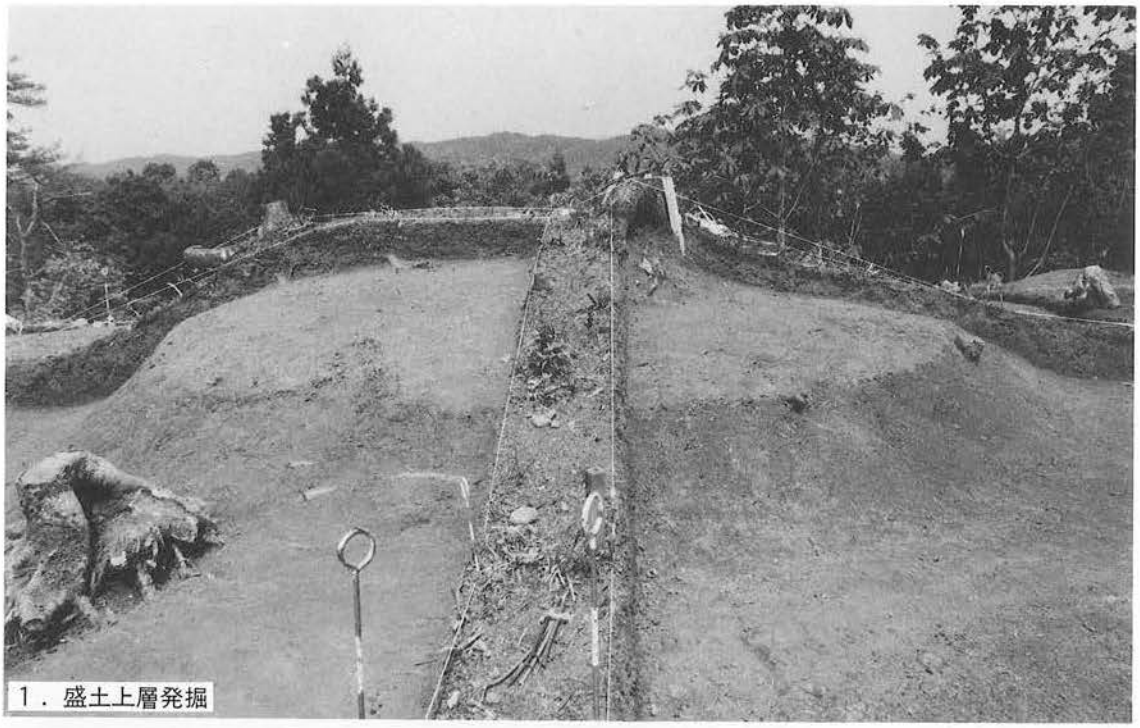
2．盛土の状況



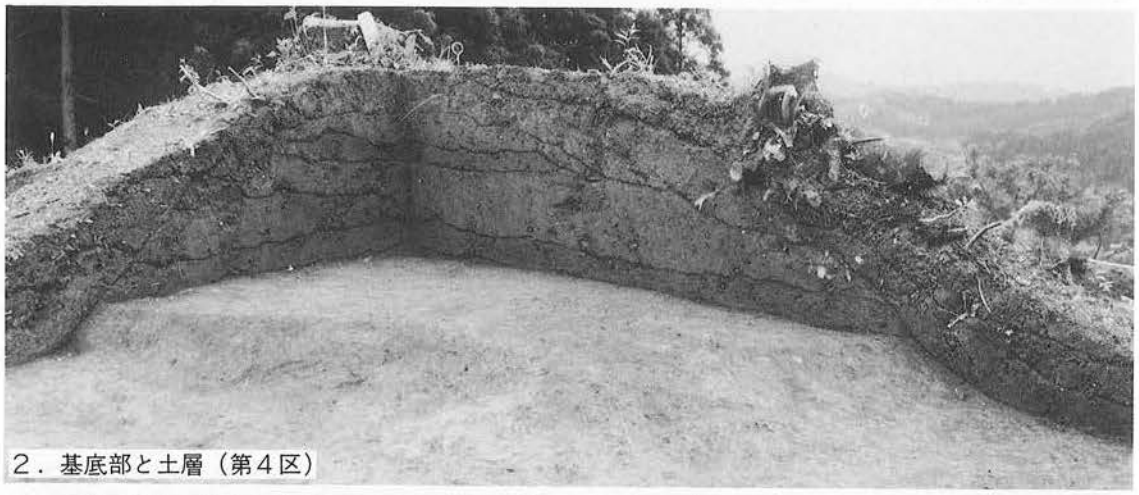
3．塚盛土範囲

第12号塚

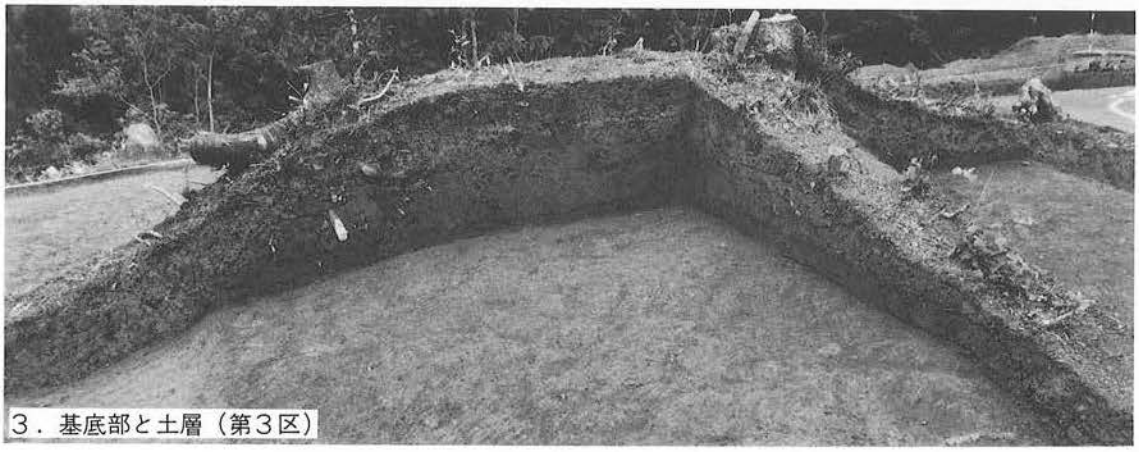
図 版 6



1．盛土上層発掘

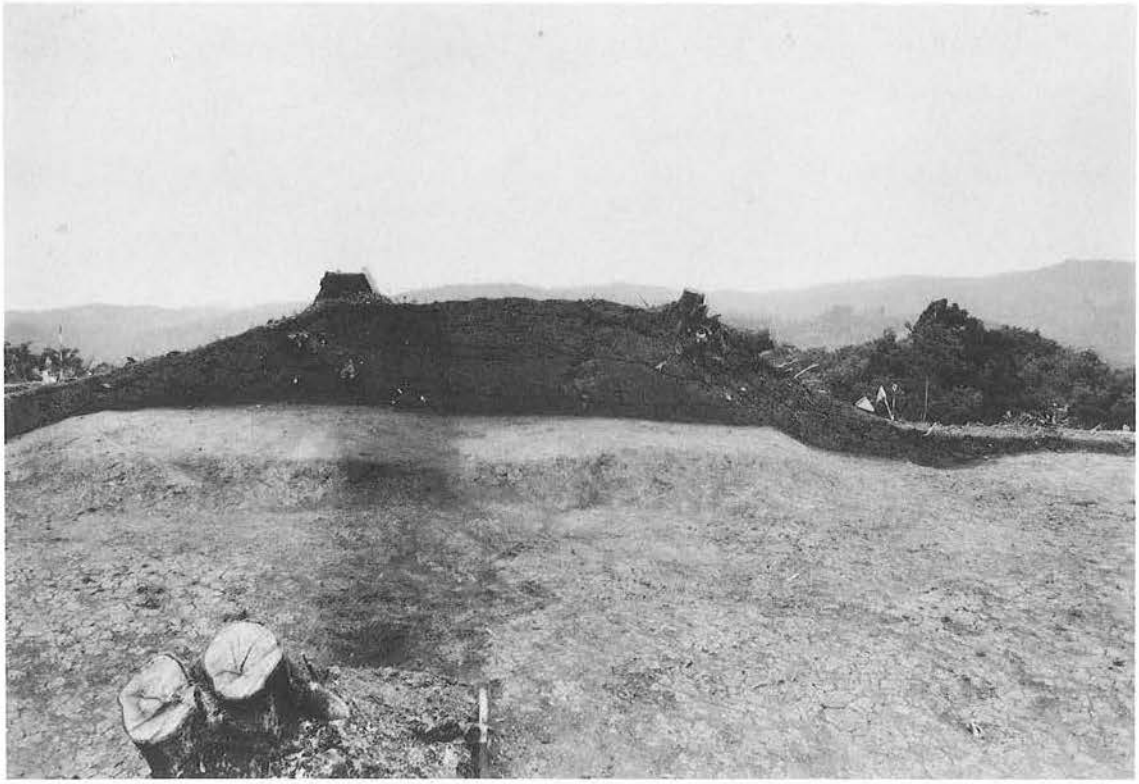


2．基底部と土層（第４区）

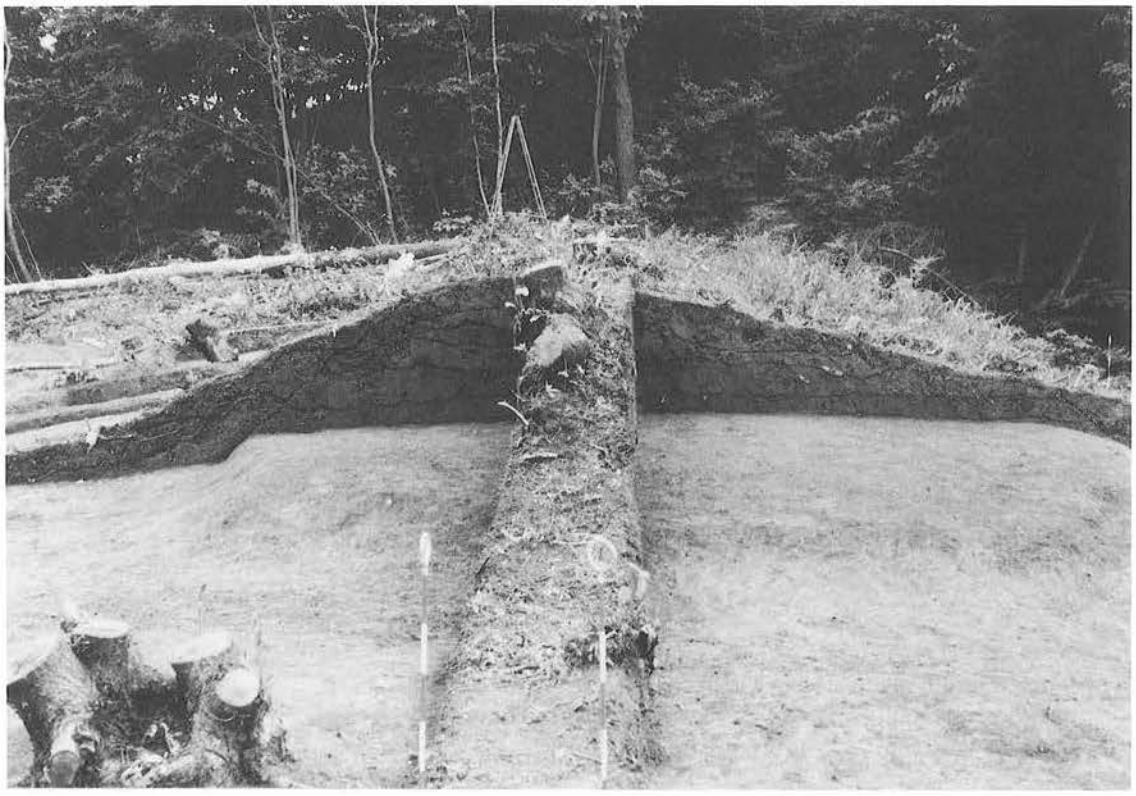


3．基底部と土層（第３区）

第12号塚



1．第12号塚 盛土層南北セクション



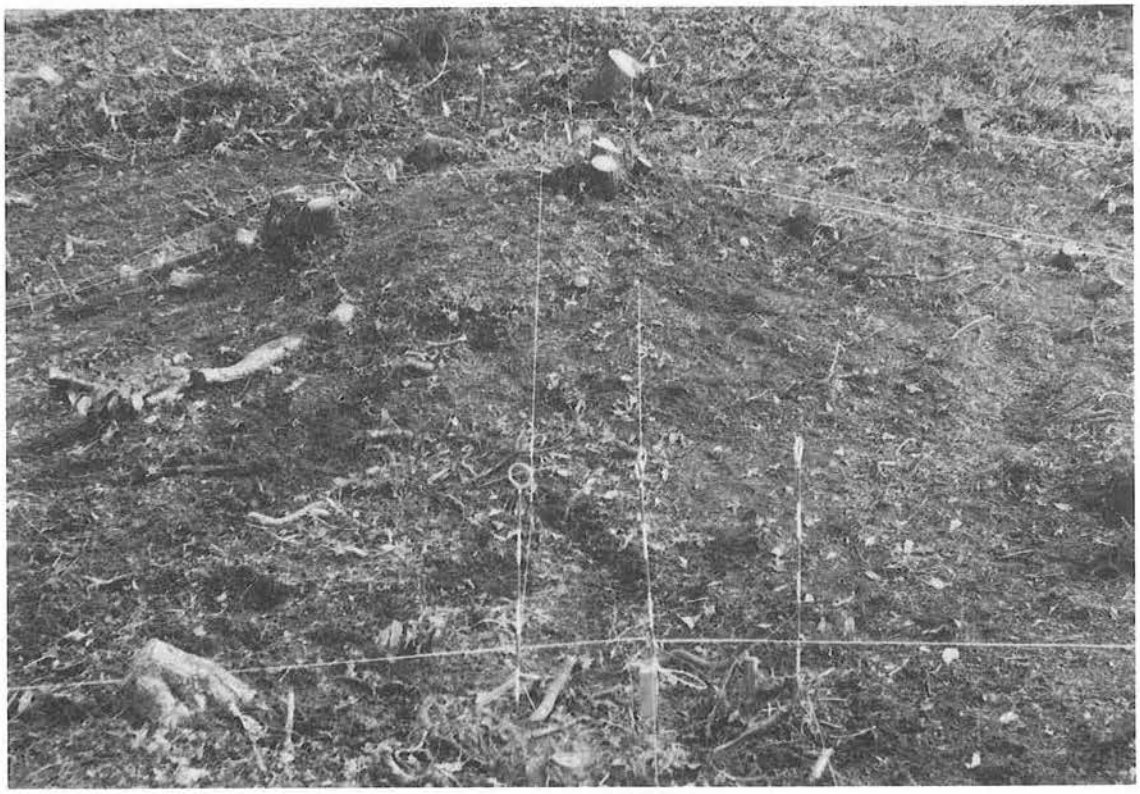
2．第12号塚 盛土層東西セクション

図版 8

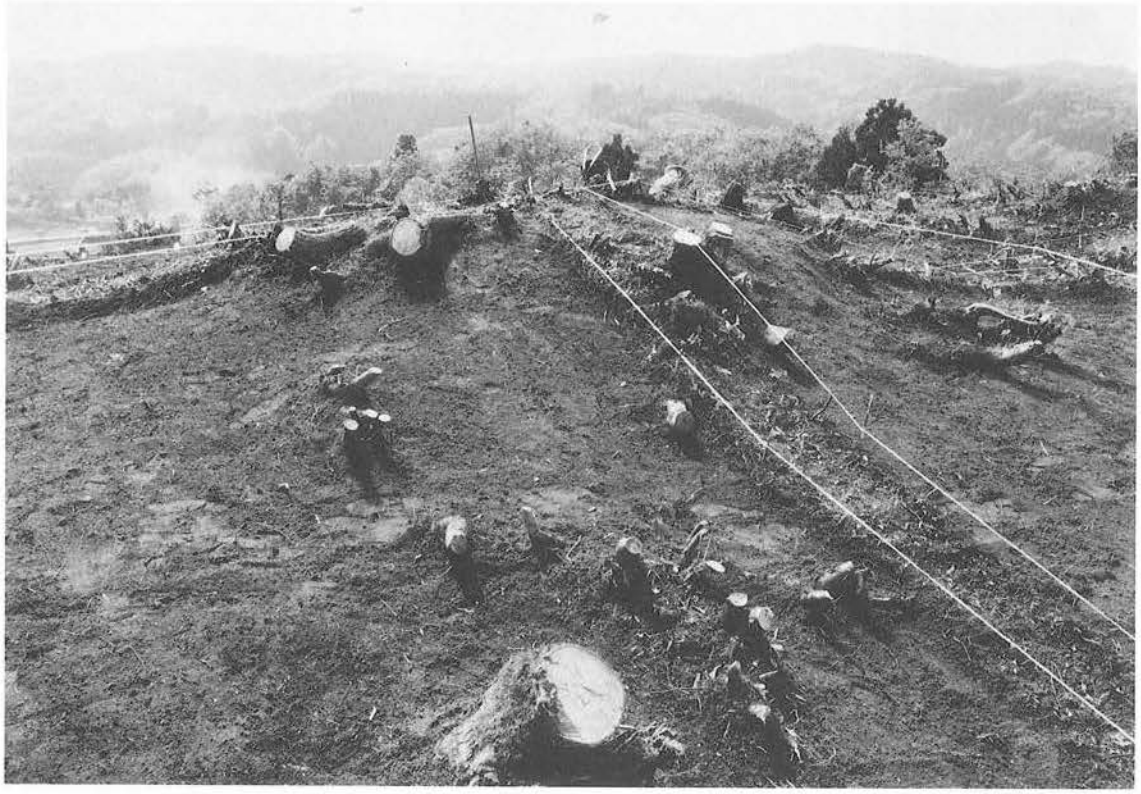
1．第12号塚基底部（南西から）

2．第12号塚基底部（南から）

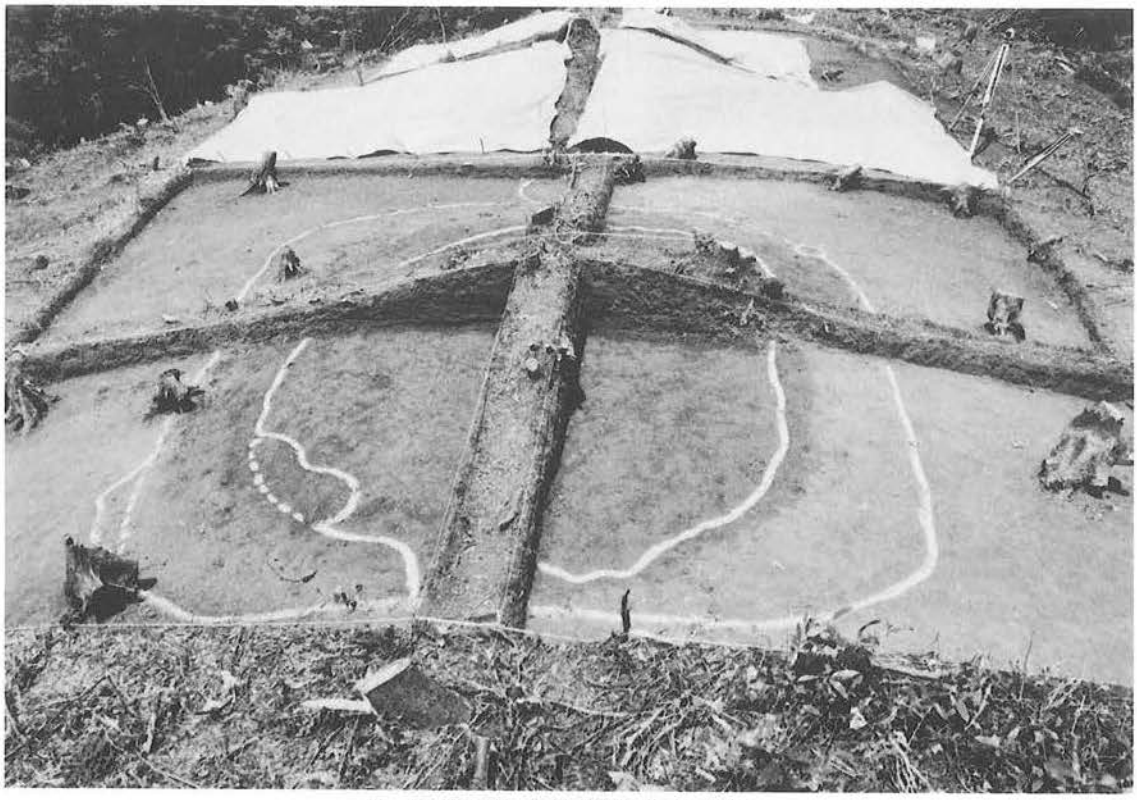
1．第13号塚 発掘前



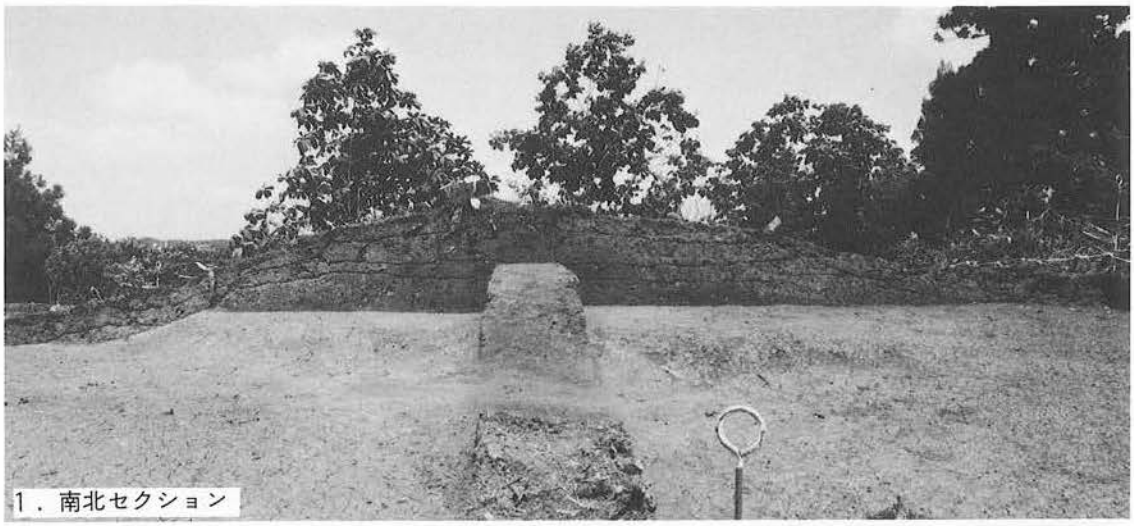
2．第13号塚 腐葉土除去



1．第13号塚 盛土状況

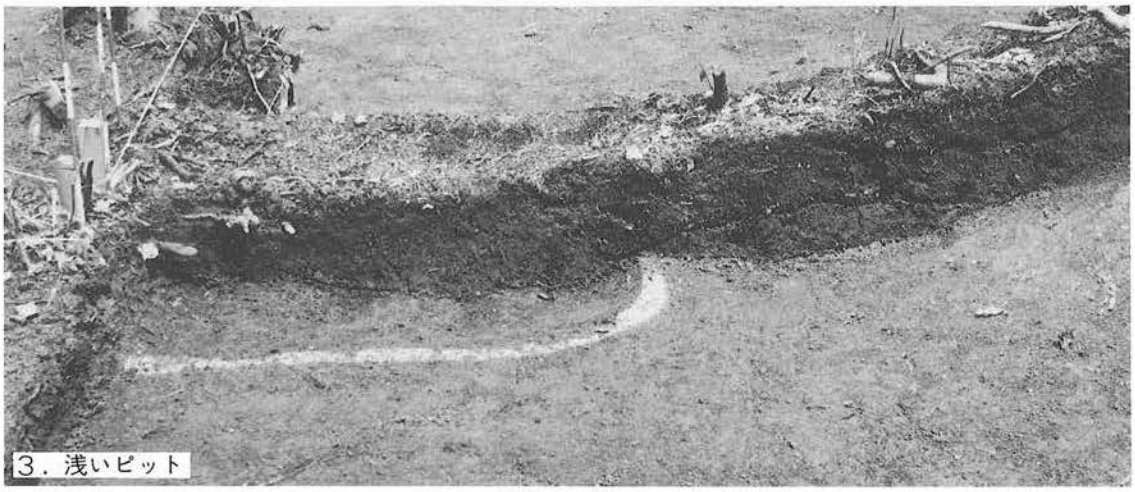


2．第13号塚 上層発掘と塚のプラン



1．南北セクション

2．東西セクション



3．浅いピット

第13号塚

図 版 12

1．第13号塚基底部　（北西から）

2．第13号塚基底部　（南から）

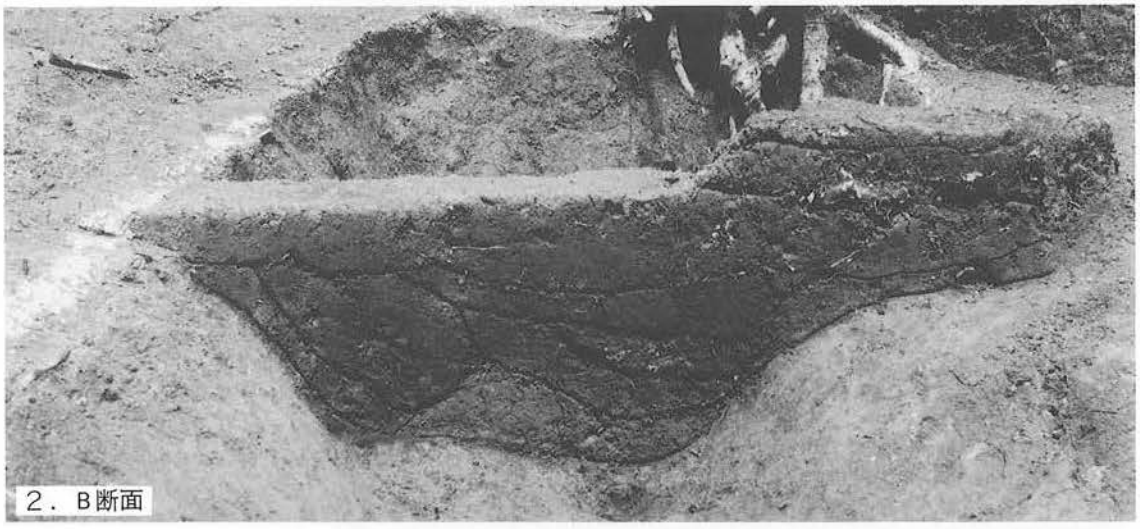
1．第15号塚

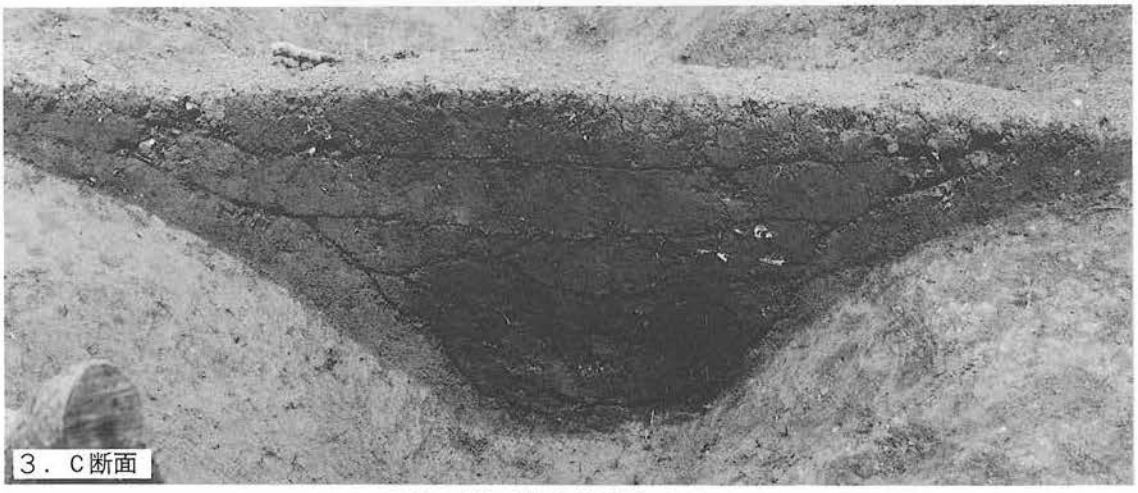
2．第14号塚

図 版 14

1．SX−10　焼土遺構確認

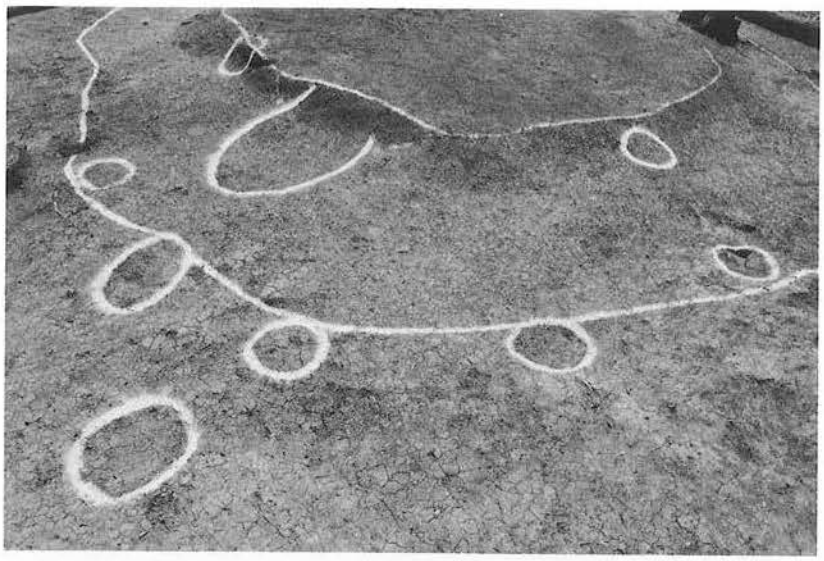
2．SX−10　焼土遺構完掘全景



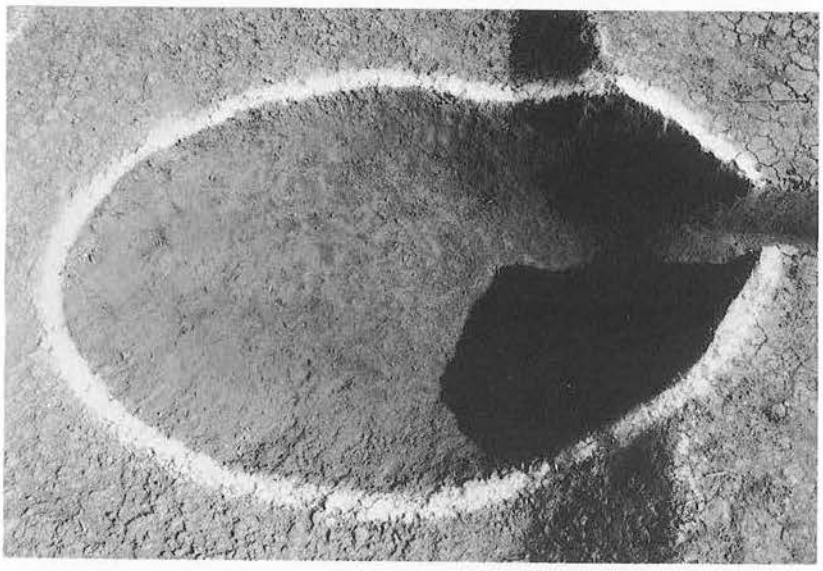


SX—10　焼土遺構セクション

図 版 16



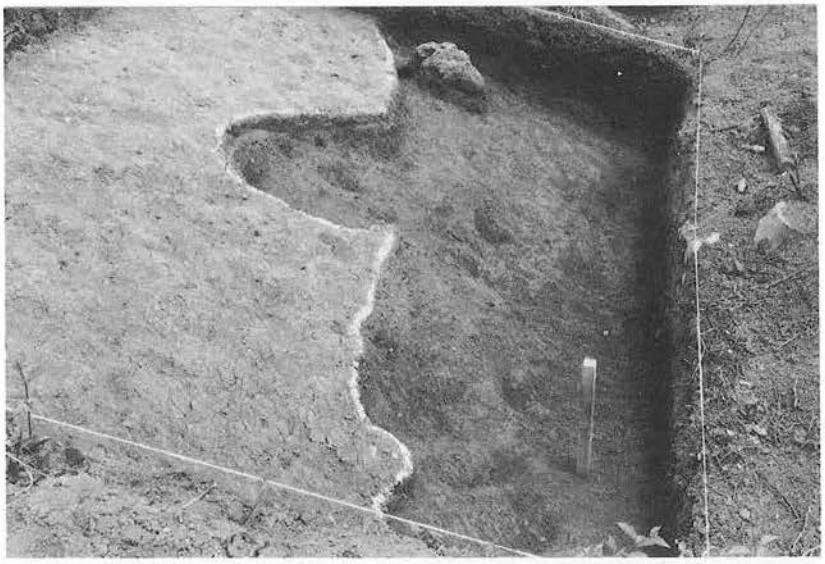
1．縄文時代ピット群



2．SK－9 土坑

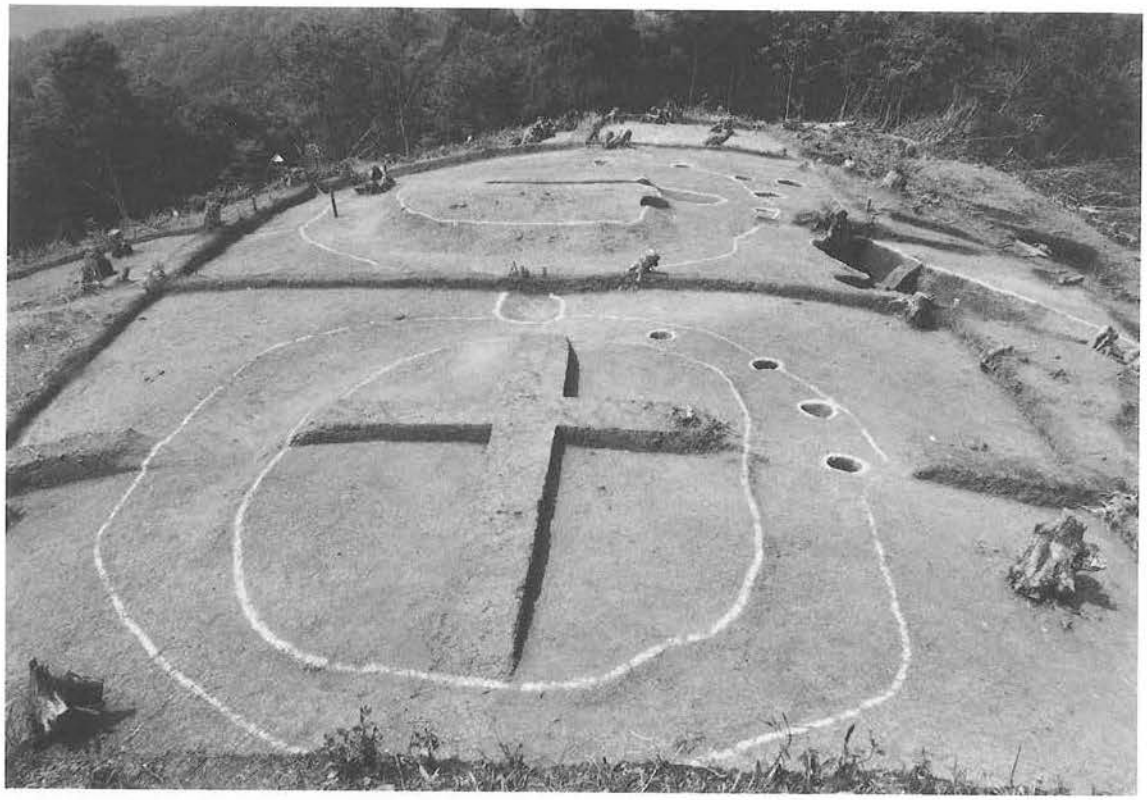
3．SX－11 ピット群

1．SX−12



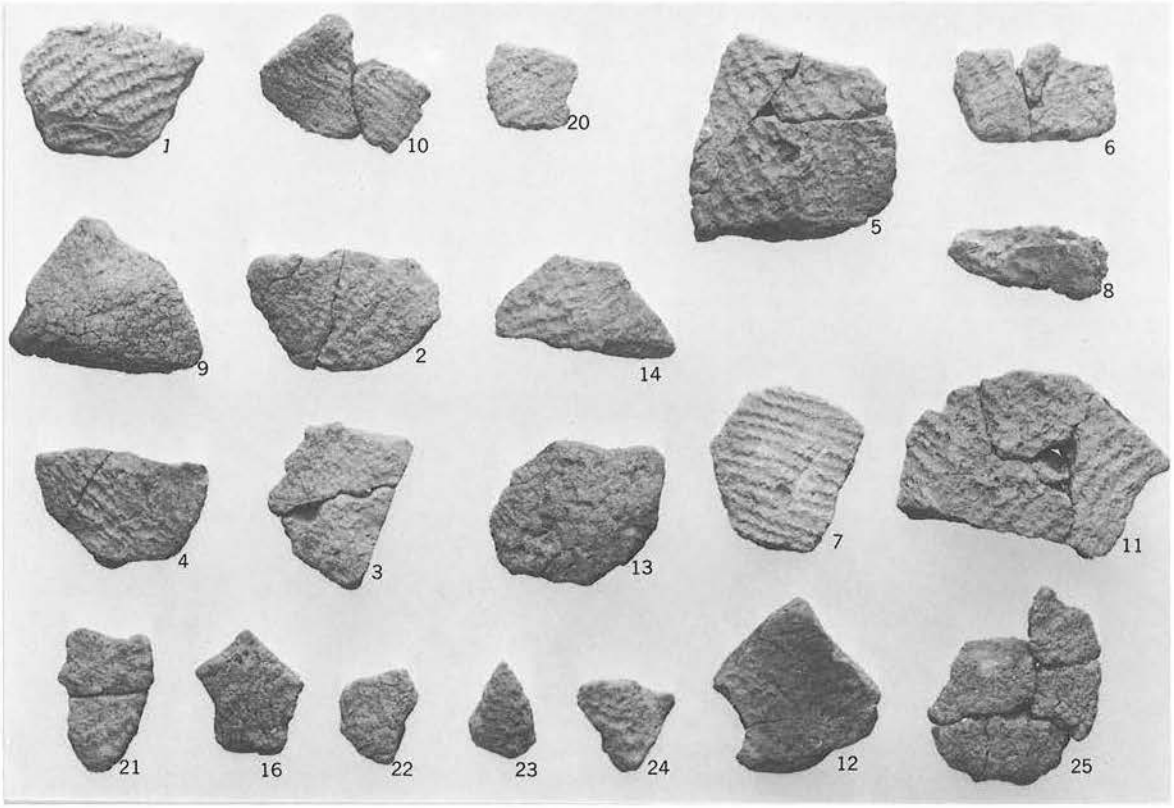
2．SX−13

3．SX−13断面

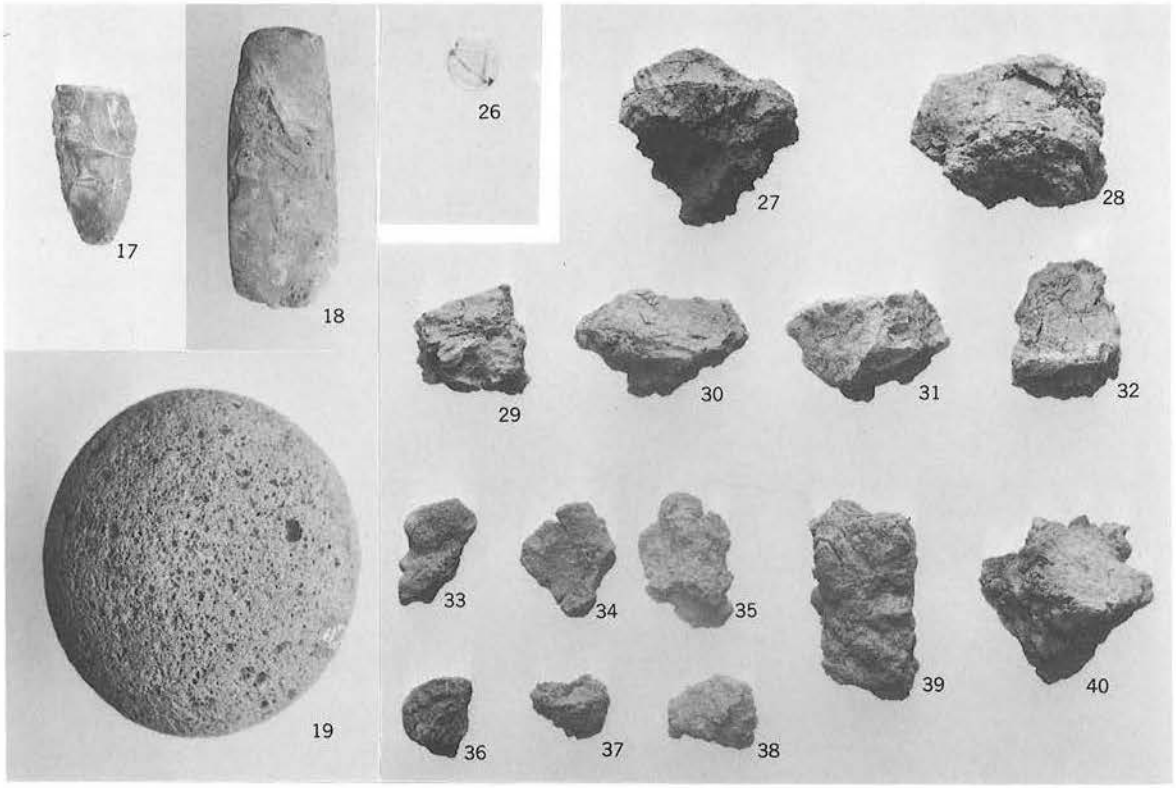


1．完掘状況　（南から）

2．完掘状況　（北から）



1．縄文土器



2．縄文石器，おはじき，焼土塊

1．第12号塚 頂部から

2．発掘調査参加者

柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第9

夏　渡　の　百　塚

―新潟県柏崎市東長鳥・夏渡の百塚発掘調査報告―

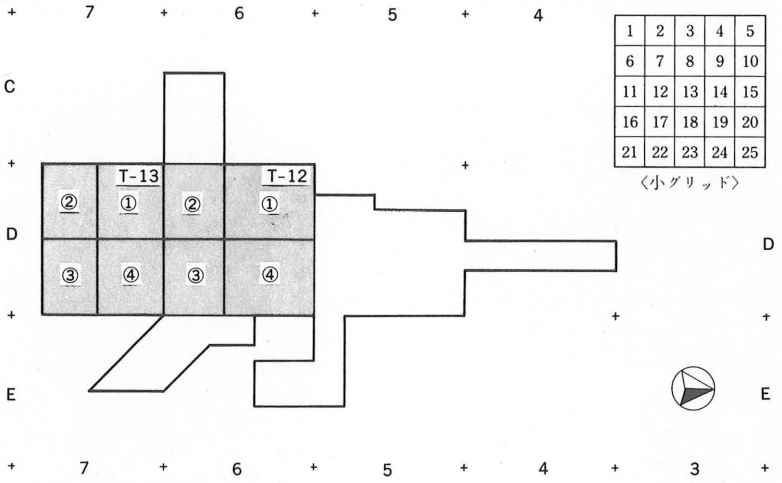
平成元年3月31日　印刷
平成元年3月31日　発行

発　行　柏崎市教育委員会
印　刷　三　　秀　　社

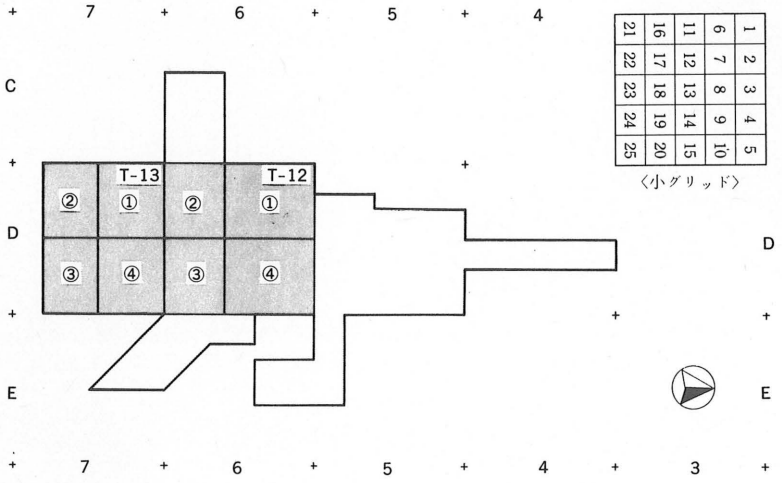
『夏渡の百塚（柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第９）』正誤表

写真図版目次　図版９の２　　第13号塚腐養土除去 → 第13号塚腐葉土除去

Ｐ４　第２図　調査区設定概念図　　下図上段 → 下図下段



第２図　調査区設定概念図（1:400）



第２図　調査区設定概念図（1:400）

Ｐ５　下から12行26字目　（第４図・図版２－１）→（第３図・図版２－１）

Ｐ10　下から15行23字目　水地帳によれば → 検地水帳によれば

Ｐ10　下から11行34字目　苦労も一塩では → 苦労も一入（ひとしお）では

Ｐ10　下から２行12字目　御教述及び → 御教示及び

Ｐ11　上から９行21字目　残在するのは → 残存するのは

Ｐ32　下から５行21字目　もっと著しいのは → もっとも著しいのは